

# 清末小説から 124

2017.1.1

- 漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 4完 「区別がつかない論」再び.....樽本照雄 1  
いくたびかの阿英目録15.....樽本照雄20  
新しい「説部叢書」研究.....神田一三22  
林訳『伊索寓言』の底本(下) 挿絵の謎を解く.....沢本郁馬35  
清末小説から34、48

本年もよろしくお願ひいたします。『清末民初小説目録X2』を公開しました。最新版です罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 4完

「区別がつかない論」再び

樽本照雄

「林序」のラム本表記

「林序」の最後は、ラム本についての説明が中心である。

余老矣。既無哈莎氏之通涉。特喜訳哈莎之書。

私は年老いた。ハガード、シェイクスピアに通曉しているわけではないが、ハガー

ドとシェイクスピアの書を特に好んで翻訳した。

林紓は年老いたと書いている。1904年当時、彼は数えの五十三歳だ。死去はその20年後である。

林訳ハガードは、のちの作品を入れると全部で20種以上を数える。だが、当時の漢訳は1種類だった。哈葛得著、林紓+魏易訳『埃司蘭情侠伝』(広智書局 光緒30(1904) HENRY RIDER HAGGARD “ERIC BRIGHTYES” 1891)だ。1種類であろうとその時点で漢訳したという事実にかわりはない。

一方、シェイクスピアについては、ラム本を漢訳した『英国詩人吟辺燕語』が最初の刊行物だ。それ以後に発表、刊行する林訳シェイクスピアは、クイラー=クーチ本(以下Q本と称する)を底本にしている。

「林序」に出てくるハガードの書とは、彼の作品を指す。また、シェイクスピアの書は、ラム本を意味している。この部分を含めて阿英らによって意図的に誤って解釈された(後述)。

「林序」にラム本が出てくる箇所を引用しよう。文字数は多くない。

林紘と共同で漢訳に従事していた魏易が登場する。林紘の説明によると次のようである(カッコ、下線筆者)。

夜中餘間。魏君偶拳莎士比筆記一二則。余就燈起草。積二十日書成。其文均莎詩之記事也。嗟夫。英人固以新為政者也。而不廢莎氏之詩。余今訳莎詩紀事。或不為吾国新学家之所屏乎。莎詩紀事。伝本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所收。僅二十則。余一一製為新名。以標其目。

夜中の暇な時に、魏君がふと『シェイクスピア物語』の1、2作を提示した。私は灯火のもとで書きはじめ二十日で完成した。それらはすべて莎劇の物語(『シェイクスピア物語』)である。ああ、英国人はもとより新しいものを政策にするが、しかし、莎劇(詩)は捨てないのだ。私は今『シェイクスピア物語』を訳したが、わが国の新学家は排除しないだろう。『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い。比較すると異同がはなはだ多く、取捨選択している。この本は20作を収録しているだけだ。私はそれぞれに新しい名をつけて題名とする。

魏易が英語原本を口述で翻訳する。林紘がそれを聞きながら古文で筆記する。林紘が採用した翻訳方法である。中国には昔からあるやり方のひとつだ。林紘のばあいは複数の共訳者がいたから、私は全体を指して林紘の「翻訳工房」といっている。主に個人で翻訳する現在のやり方を基準にして過去を非難してよいものではない。ましてや、林紘が外国語を知らなかったことは、決定的な欠陥とはならない。

前述のとおり、胡適は林紘をシェイクスピアにとっての大罪人だと批判した<sup>\*35</sup>。脚本を小

説のかたちに変更して翻訳したからだというのだ。その胡適は、フランスのドーデ作品を英訳に基づいて重訳していた。あたかもフランス語原文から直接漢訳したように装った。林紘批判と無関係ではない。胡適が英語経由でドーデ作品を漢訳したことは、林紘と魏易が作業を分担して翻訳したのと、他者を媒介するという点において同質だからだ。林紘批判が前提としてあるから胡適は自らの翻訳方法を秘密にした<sup>\*36</sup>。

莎劇(詩)とラム本

さて、上に見てきたとおり「林序」にはシェイクスピアに関係することばがいくつか出てくる。抜き出し、日本語も示す。参考までに瀬戸博士の訳も「/」以下に掲げる。あとで検討する。

詩家之莎士比 詩人のシェイクスピア

/ 詩人のシェイクスピア 89頁

莎士比筆記 『シェイクスピア物語』

/ シェイクスピアの要約 91、94頁

莎詩之記事 莎劇の物語 = 『シェイクスピア物語』

/ シェイクスピアの詩の要約 91、94頁

莎氏之詩 莎劇(詩)

/ シェイクスピア氏の詩 89、90頁

莎詩紀事 『シェイクスピア物語』

/ シェイクスピアの詩の記事91頁、  
シェイクスピアの梗概 99頁

一覧を見れば、林紘が莎劇(詩)とラム『シェイクスピア物語』を厳密に区別していることがわかる。語彙を変えているのは、修辞上の技巧による。

いうまでもなく書名『英国詩人吟辺燕語』の「英国詩人」はシェイクスピアを意味する。シェイクスピアはあくまでも詩人だ。それを含めて林紘は語彙を使い分け正しい認識を示している。

前出レヴィスが魏易部分を英訳している。見てみよう。

【レヴィス】When free one night, Mr. Wei picked up some Shakespeare by chance; I started scribbling away by the night lamp. Twenty day later we have a book of Shakespeare's poetic tales. p.5

暇なある夜、魏君がふとシェイクスピアのいくつかを差し出した。私は灯火のもとで走り書きをはじめた。二十日の後、シェイクスピアの詩的な物語1冊ができていた。

上の文章には注がついている。前出、費春放 FAYE CHUNFANG FEIからの引用(115-16頁)であるという(確認済み)。レヴィスは異論をはさんでいない。費春放の英訳に賛成しているからそのまま引いたと思われる。

魏易が差し出した「莎士比筆記一二則」を費春放は「some Shakespeareシェイクスピアのいくつか」とのみ英訳した。これでは莎劇そのものになる。原文の「筆記」を無視してここは誤訳だ。20日後にできたのが「莎詩之紀事」である。原文の意味は『シェイクスピア物語』だが英訳して「Shakespeare's poetic talesシェイクスピアの詩的な物語」とする。漢語の字面を忠実に翻訳したが、もう一步の説明がない。ラム本だと言明しないから奇妙な展開になる。莎劇から直接漢訳して物語にしてしまった。戯曲を小説化したと誤解している。費春放とレヴィスはそう思い込んでいるようだ。「林序」にはそのようなことは書かれていない。ここにはラム本がないから英訳の誤りである。

徐錦 TSUI KAM JEAN (2008)\*<sup>37</sup>が前出「林序」部分を英訳して次のようにする。

【徐錦】On one of our working nights, Mr. Wei happened to have shown me some works of Shakespeare and I started scribbling by the

night lamp right away. And twenty days later, we had a book of Shakespeare's verses in prose adaptation.

私たちが仕事をしていたある夜、魏君がシェイクスピア作品のいくつかを私に示したことがあった。私は灯火のもとで走り書きをはじめた。二十日の後、散文に書き換えられたシェイクスピア詩の本になった。

徐錦の英訳を見て私は再び落胆する。

「莎士比筆記」は、『シェイクスピア物語』であると私は指摘しつづけている。ところが、徐錦は「シェイクスピア作品works of Shakespeare」だと解釈した。費春放と同じではないか。莎劇(詩)そのものだ。林紓らがラム本にもとづいて漢訳したことをすでに忘れている。

つぎの「莎詩之紀事」を「シェイクスピア詩 Shakespeare's verses」と「in prose adaptation散文に書き換えられた」に分解した。分解した瞬間にラム本が消滅した。林紓と魏易が、シェイクスピアの原作にもとづき散文の形式にかえて漢訳したことになった。徐錦はそう訳して、1918年時点の劉半農、胡適による林訳批判に後戻りしたのである。考え間違いだ。

「林序」にあるシェイクスピア関係の単語について瀬戸博士の日本語訳を見よう。

原文の「筆記」を訳して「要約」に、おなじく「記事」を「要約」に、また「紀事」を訳して「記事」と「梗概」にしている。訳語が不安定だ。なぜなのか。原文がそうなっているというのであれば、解説をしなければならない。

瀬戸博士が書いている「詩の要約」「詩の記事」についての具体的な説明がないともう一度いう。何を意味しているのか。瀬戸博士は書いていないから私には理解できない。林紓が詩(戯曲)と小説を区別して語句を書き分けているにもかかわらず、瀬戸博士の日本語訳がゆれている。

瀬戸博士はその理由を次のように書く。「林

紵が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」(94頁)

瀬戸博士が書く「単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず」という箇所は、前後関係が理解しにくい。「シェイクスピア作品の圧縮」がラムの『シェイクスピア物語』だ。詩(戯曲)を小説に書き直して「圧縮」した。ここまでは、いい。ところが、これに「単なる」「すぎず」を加えて「両者の間には本質的な相違はないと考えた」と述べる。「両者」というのだから詩(戯曲)と小説を指している。両者を区別していながら、「本質的な相違はない」というのは論理矛盾だ。瀬戸博士は、論理矛盾を犯してまで林紵を無知だと強調したいらしい。無効である。

くり返す。シェイクスピア作品は詩(戯曲)だし、ラムがそれを「圧縮」して小説に書き換えた。林紵は、戯曲と小説を区別していたから当然そう理解している。瀬戸博士の説明が奇妙なのはそこにラム名の有無をからませる点だ。「底本を記さなかった」ことが「両者の間には本質的な相違はないと考えた」にされる。詩(戯曲)と小説を区別しているにもかかわらず、ラム名を出さなかったことだけを根拠にして「両者の間には本質的な相違はないと考えた」。区別しているのに区別ができていない。そう瀬戸博士は説明する。これほど奇天烈な説明があるだろうか。

上の対照表に示したように、瀬戸博士は「詩の要約」「詩の記事」「梗概」などと用語を統一せず放置したままだ。もうひとつの疑問が出てくる。訳語をわざとあいまいにしているのではなからうか。あとでもう一度問題にする。

「林序」には読者に誤解を与える表現がある。前に「ハガードとシェイクスピアの書の特によるこんで翻訳した」と書いた。シェイクスピア

の名前を出して実際に訳したのはラム『シェイクスピア物語』だ。また、ここで「莎劇(詩)は捨てない」と言及しながら、ラム『シェイクスピア物語』を漢訳したと書いた。ラムつながりでシェイクスピアに言及したのだが、ここが阿英の誤解を引き起こす根拠となった。

#### 阿英による誤解の影響

シェイクスピアの名前を出しながら実際に漢訳したのはラム『シェイクスピア物語』だ。シェイクスピア原作、ラム改作、林紵+魏易訳と書けば、より正確だった。しかし、林紵たちは、ラム名を省略した。

『吟辺燕語』の著者は、莎士比(シェイクスピア)となっている。書物を見ればたしかにそうだ。

そこから阿英は次のように解釈した。林紵は、「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した(誤原本為《沙氏筆記》)」\*38。

シェイクスピアの原本がすなわちラム本だとは、奇想天外な解釈であるといわなければならない。詩人のシェイクスピアが小説を、しかも自分の名前を冠した『シェイクスピア物語』を書いたことになるからだ。想像を絶する阿英の空想力だといっていいい。

阿英は、漢字わずか8文字を使用して林紵の無知を証明したつもりだ。しかし、ここには論理矛盾がある。

すなわち、ラムの名前がないからこそ林紵は莎劇(詩)を小説に書き換えたという批判が生じた。だが、阿英はなぜ林紵の底本が『沙氏筆記(『シェイクスピア物語』)』であると指摘できたのか。

阿英が執筆した林紵誤解説は1938年だ。阿英目録は、彼自身の説明によると1940年に編集し終わったという(「叙記」3頁)。

その阿英目録124頁には、『吟辺燕語』の著者を「英蘭姆著」と明記している。これはとても異様だ。『吟辺燕語』にはどこにもラムの

記述がない。そこを根拠にして「林紓は、原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した」と阿英は断定し林紓の無知をあざ笑った。だが、自分の目録には、原書にない「英蘭姆著」を記録している。

阿英が使用している用語にもう一度注目してほしい。重要な箇所だからくり返す。「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した(誤原本為《沙氏筆記》)」の「沙氏筆記」である。「林序」では「莎士比筆記」と書いて『シェイクスピア物語』の意味だ。阿英の書いた「沙氏筆記」と「林序」の「莎士比筆記」は同じではないか。ということは、「林序」において実行している区別を阿英は正しく理解していたということになる。

阿英は『吟辺燕語』の著者がラムであることを知っていた。知っていながらラム名が書かれていないところだけをつかんで「林紓は、原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した」と無理矢理にでっちあげた。林紓を批判するためには捏造もためらわない。確信犯である。

そこから次のことがわかる。阿英は林紓のことを無知だと批判したかった。その目的を実現するためにひねり出した説明だ。

阿英の背後には、劉半農、胡適、鄭振鐸らの「区別がつかない論」が存在している。林紓は、シェイクスピアについて何も知らない。そう批判し続けていた人々だ。

阿英は、事実とか論理的整合性について最初から無視していたとしか思えない。

阿英がどのように考えていたかは文章を見るだけではわからない。林紓は無知であったという指摘だけが残った。清末文学研究の分野では先駆者であり権威である阿英の断言だ。今にいたるまで大きな影響力を維持している。

呉慧堅(2009)\*<sup>39</sup>は、論文の最初部分で林紓の「誤解」について指摘する。原文も示す。

林紓は、ラム姉弟がシェイクスピア戯曲

にもとづいて散文物語に書き換えたのを誤ってシェイクスピアの作品そのものにしてしまい、シェイクスピアを「戯劇家」でなく「小説家」として読者の前に出現させた(林紓把蘭姆姐弟根据莎士比亞戯劇改写的散文故事誤当作莎士比亞的作品,讓莎士比亞以小説家而非戯劇家的面目呈現在讀者面前)。

前出李偉昉も同じようなことを書いている。

シェイクスピアは、林紓らによって間違えて古代伝奇作家の身分で翻訳紹介された(莎士比亞以古代伝奇作家身份,被林紓等人錯位紹介)。160頁

林紓は、シェイクスピアについてそのようなことを書いてはいない。「林序」には「詩家之莎士比(詩人のシェイクスピア)」と明記している。なによりも漢訳の書名が『英国詩人吟辺燕語』と「詩人」ではないか。「英国詩人」はまさにシェイクスピアを意味している。この「詩人」は、現代風に書けば劇作家だ。呉慧堅、李偉昉らは、それを見逃した。あるいは忘れたかわざと無視した。林紓を貶めてはなはだしい。

宋莉華も、林紓は作者をシェイクスピアだと誤認した(286頁)と説明する。「林序」の該当部分を引用しての解説だから、どこを読んだのかという疑問が生じるのもしかたがない。

呉李宋らは、阿英の意図的な誤解をそのまま受け継いでいる。阿英の影響力は絶大だとわかる。彼らは阿英に誤誘導された研究者たちだ。

伝本多数

もうひとつ言わなければならないことがある。底本選択の際に示した林紓らの慎重な態度だ。

林紓は『シェイクスピア物語』について「伝本がきわめて多い」と書いている。偶然にラム本を選択したわけではない。そう考えるとすれ

ば、誤解である。

莎劇(詩)を小説化したのはラム姉弟しかいなかったわけではない。1904年以前の刊行物で改編者名だけを列挙しよう(\*印未見)。シェイクスピアを書名に組み込んでいることだけを指摘し題名は省略する。刊年はズレているばあいがある。

\*Thomas Bowdler 1807

\*Robert R. Raymond 1882

\*Mary Seymour[Seamer] 1883

Charles Alias 1885

\*Mara L. Pratt 1890

Harrison Smith Morris 1893

\*Edith Nesbit 1898

M. Surtees Townesend 1899

Jeanie Lang 1900 / 1909

\*Mary Macleod 1902

\*Ada Baynes Stidolph 1902

林訳の前には、ざっと以上のような小説化本が存在している。実際にはもっと多いだろう。

林紘と魏易はその中から慎重に選択しラム本1冊を得た。魏易がこんなものがあります、と偶然差し出したように林紘は描写した。そこから、いかにも思いつきによる気軽な漢訳だと受け取る人がいた。鄭振鐸だ。しかし、事實は綿密な準備を経たうえでの翻訳作業だったのだ。

シェイクスピア作品を小説化した書物の多くが児童用書に分類される。鄭振鐸は林訳を非難し、無価値な作家の作品が多く混入していることをいった。あくまでも鄭振鐸から見ての無価値な作品である。さらに児童用の物語読本をあげて攻撃している。鄭振鐸の目からすればラム本もその中のひとつだ。しかし、郭沫若は子供のとき林訳ラム本を読んで感激したが、成人になってシェイクスピア劇そのものを読んでもラム本ほどは身近に感じなかったという。研究者によく引用される話だ。児童用の物語だからと

いって蔑視する鄭振鐸のほうが間違っている。

劉半農から胡適を経て鄭振鐸へ

漢訳ラム本2種の序を検討した結果は次のとおり。

漢訳者たちは、莎劇(詩)と散文であるラム本を区別し両者の違いを明確に認識している。

以上を確認したうえで、林訳批判を行なった劉半農、胡適、鄭振鐸の「区別がつかない論」に的を絞って検討する。

おおよその経過をおさらいしておこう。

劉半農は、『吟辺燕語』を取りだして林紘が「詩」と「戯」の区別がつかないと罵った。

胡適が、劉半農の用語を変更して「戯曲」と「記叙体」に修正した。

林紘の死後、前述のとおり鄭振鐸(1924)\*40は劉半農、胡適の展開した林訳批判を継承しつつ根本的な2カ所を修正した。

ひとつは、非難攻撃の根拠とした漢訳作品の『吟辺燕語』を取り下げた。もうひとつは用語を「小説」と「戯曲」に書き換えた。

私は何度でもいう。取り下げて何をしたか。根拠となる作品を別のシェイクスピア作品とイブセン作品に入れ替えた。その上で、林紘は「小説」と「戯曲」の区別がつかないと強烈に批判した。ここでいう「戯曲」は脚本のこと。詩形式かどうかは問わない。なぜなら、イブセン戯曲を含めているからだ。

証拠としての『吟辺燕語』は取り下げたが抹消したわけではない。鄭振鐸は、同文の別の箇所でも明記して『吟辺燕語』を掲げている。『吟辺燕語』にはラムの名前はもともと記載されていない。そこからわかるように鄭振鐸は原作がラムの小説であることを知っていた。もともと小説なのだから林紘らが漢訳して小説になるのは当然のこと。莎劇を小説に変更して漢訳したと責める根拠にはならない。

鄭振鐸を見ると、あとから発表された林訳のシェイクスピア「リチャード2世」「ヘンリー

4世』『ヘンリー6世』『ジュリアス・シーザー』『ヘンリー5世』など、またイブセン『幽霊』は、あきらかに原作の戯曲を小説に書き換えている。鄭振鐸の林訳批判はそこを突いた。彼の非難攻撃は完璧である(はずだった)。中国を中心に、ひろく世界中の研究者は鄭振鐸の批判を正しいものとして受け入れ、彼と同じく林訳を非難攻撃しつづけたのが歴史的実だ。

ところがその鄭振鐸の指摘は間違っていた。2007年、林訳の底本は、それぞれQ本とドレイコット・M・デル本であることが明らかにされたのだ。小説を漢訳して小説になるのは何の不思議もない。ラム本と同じこと。鄭振鐸は、林紓に濡れ衣を着せたのだ。現在では林紓冤罪事件であることが明らかになっている。

鄭振鐸は用語を「小説」と「戯曲」に置き換える必要を認めた。それは、劉半農の実行した対林訳批判が間違っていることに鄭振鐸も気づいていたからだとくり返す。また、胡適が修正したことも彼は理解していた。

劉半農の文章を見てみよう。

#### 劉半農の「区別がつかない論」

劉半農(1918)<sup>\*41</sup>は、「詩」と「戯」という単語を対立項目として提出した。

問題の箇所は以下のとおり。

吟辺燕語本来是部英国的戯考，林先生於『詩』『戯』兩項，尚未辨明，知識實比『不辨菽麥』高不了許多。274頁(影印本316頁)

『吟辺燕語』は、もとは英国の『戯考』であるが、林氏は「詩」と「戯」のふたつを識別していない。その知識は実に「豆と麦の区別がつかない」に比べてもあまりにもひどい。

最初に指摘しなければならないのは、劉半農が提示している「詩」と「戯」が奇妙だ。

「林序」で出てくる単語は「詩」とそれに対立する「筆記」「記事」「紀事」である。どこにも「戯」などありはしない。「戯」は「詩」に対立するものとして劉半農が「林序」とは関係なく独自に提出したものだと思える。

劉半農がここで対比させた「詩」と「戯」の中身について考える。研究者は、その内容について検討したことがほとんどないようだ。説明の必要がないほどの常識に属すると思われるらしい。

林訳『吟辺燕語』にはラムの名前がない。劉半農は、林紓らが莎劇(詩)を直接漢訳して『吟辺燕語』にしたことにしたい。いうまでもなく出てきた『吟辺燕語』は小説だ。ゆえに、戯曲を小説にした、「豆と麦の区別がつかない」ことが批判の理由になる。これが基本の考えだ。

誰も何もいわないが、冒頭の「『吟辺燕語』は、もとは英国の『戯考』である」という文章は理解しにくい。林紓が莎劇(詩)とラム本を辨別している事実と合致しないのである。つまり「林序」の記述にもとづけば劉半農の説明には論理的整合性がない。

「もとは(本来是)」とある。『吟辺燕語』が使用した底本はシェイクスピア原作(莎劇)であるというならば、劉半農の記述は正しい。莎劇(詩)を小説化したという批判に結びつく。それにしても「戯」とは対応しないが。

劉半農があげているのは、そこに当然あるべき莎劇(詩)ではなく「英国の『戯考』」である。これは奇妙だ。

『戯考』は中国の1910年代から20年代にかけて刊行されていた演劇叢書だ。中国伝統演劇の脚本を掲載した。それらは詩形式ではない。劉半農の説明に従えば、底本は英国の詩形式ではない脚本ということになる。ならば莎劇(詩)ではない。結局のところ、林訳の底本がなにであるのか不明になってしまう。それはおかしい。

さらに、劉半農のいうもう一方の「詩」とは

何か。

シェイクスピアの「ソネット集」などの「詩」ではありえない。林訳は、詩集の漢訳ではないからだ。

劉半農は林訳を非難している。「林序」に見える「詩」と同じでなければならぬ。莎劇(詩)そのものだ。

以上をまとめる。劉半農のいう「詩」は詩形式の脚本であり、それに対置した「戯」は詩形式ではない脚本だ。

これではどちらも脚本になってしまう。小説であるラム本は、どこかに消えてしまった。小説の『吟辺燕語』を話題にしているにもかかわらず小説がでてこなければ「区別がつかない」どころの話ではない。

「林序」において使われた語句を劉半農の文章にあてはめて読めば、批判文として成立しない。

別の側面から考える。

劉半農は、錢玄同と組んで「なれあいの手紙」を捏造した人物だ。林紓を罵るために該文を書いている。林紓ほど明確に用語を区別して使用し立論しているとは思えない。

シェイクスピアを劇作家と詩人に分ける。その俗論に現代の中国人研究者たちは染まっている。劉半農がその俗論を有していた先人だったとしてみよう。

冒頭部分は、『吟辺燕語』の原作は英国の脚本だといっているにすぎない。莎劇という意味で使用しているならば、詩形式であるかどうかは問わないことになる。ずさんな書き方である。

劉半農から見ればシェイクスピアは劇作家であるにもかかわらず、林紓は詩人として扱っている。ゆえに林紓は「詩」と「戯」の区別がつかない。ただそれだけ。

『吟辺燕語』について劉半農の使用した用語を見ていくと、奇妙なことになる。彼は、林紓が「戯曲と小説の区別がつかない」と主張したい。だが、厳密に点検すると劉半農の指摘その

ものが成立しない。

「林序」では、莎劇(詩)を意味する「莎氏之詩」、および『シェイクスピア物語』を意味する「莎士比筆記」「莎詩之紀事」「莎詩紀事」に書き分けていた。劉半農からすれば、そのような厳密さは彼の理解の範囲外だった。

劉半農は俗論にもとづいて「区別がつかない論」を掲げた。なるほど、そういうことなのだ。俗論から抜け出せない現代の研究者たちが劉半農の書いたこの部分を不思議にも思わず、当たり前のように素通りしてしまう理由だ。現代の知識でもって「詩」と「戯」が対立すると理解している。

区別がつかなかったのは、林紓ではなく劉半農、またそれを継承した研究者たちの方であった。

林紓が区別して使用したことばをふまえて意味が通じるようにこの部分を書きかえるとすればどうなるか。誤解を避けるために重ねていうが、林紓の厳密な用語法を劉半農のずさんな批判文に適用するならばどう記述すべきか、である。

『吟辺燕語』はもとは莎劇である、としなければならなかった。その時、劉半農はあくまでも林訳がラム本であることを知らない風に装う。もとの莎劇、つまり脚本を勝手に小説化したというのが批判の要点だ。それにあわせるために「戯」を「小説」に訂正する。すなわち莎劇(詩)を意味する「詩」と林訳『吟辺燕語』の「小説」を対立させてはじめて劉半農の林訳批判は成立する。

とはいえ、林紓は詩と小説を区別していた。劉半農がいくら用語を書き直しても林紓に対しては無効であることに変わりがない。結果として、劉半農は、林紓が誤っている、区別がつかない、という根拠のない印象を人々に残すことには成功した。これが事実だ。

胡適は、『吟辺燕語』に関する劉半農の説明に不備があることを察知した。続く『新青年』



第4巻第4号(1918.4.15)において発表する「建設的文学革命論」においてその部分をただちに修正したのである。

林琴南把Shakespear<sup>ママ</sup>の戯曲，訳成了記叙体的古文！這真是Shakespear<sup>ママ</sup>的大罪人。

胡適の主眼は、翻訳に古文を使うな、と主張するところにある。林紘の翻訳についてはさりげなく「戯曲」と「記叙体」すなわち散文(小説)に用語を変更したのだ。そうしたうえで「本当にシェイクスピアにとっての大罪人である」と林紘を批判した。

銭玄同(王敬軒)と劉半農が『吟辺燕語』を掲げた直後であるところにご注目いただきたい。林紘がシェイクスピアの戯曲を古文で散文に翻訳した、と胡適が書けば、『吟辺燕語』について説明していると考えるのが自然だ。

胡適は、「区別がつかない論」を内部から修正して補強したということが出来る。胡適はあらためて、林紘は戯曲と小説の区別がつかなかったと非難した。

#### 瀬戸博士の理解

この自然な流れを理解できないのが瀬戸博士だ。説明してつぎのとおり。

胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい<sup>[18]</sup>。ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう。99頁

劉半農が『吟辺燕語』を提起した直後に胡適の修正が示された。瀬戸博士は、文章が公表されたこの時系列を無視している。文章を真摯に読んでいない。読んだが理解できなかったか。胡適説を認めながら根拠となる林訳作品を勝手

に入れ替えた。「『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」という推測は正しくない。瀬戸博士自身が別の箇所ですべてのように説明しているのを忘れたか。「林紘の翻訳(注：Qの『シェイクスピア歴史物語集』)も『吟辺燕語』と異なりほとんど反響を呼ばず、初出のままに終わり単行本発行あるいは再刊行はされていない」93頁

「ほとんど反響を呼ばない林訳作品を指してどうするのか。広く読まれていた『吟辺燕語』だからこそ批判の根拠となりうる。ラム『シェイクスピア物語』を知っていた胡適はそれを隠し、銭玄同、劉半農の提出した『吟辺燕語』を引き継いで林紘批判をくり返した。それ以外に読みようがない。

瀬戸博士は、劉半農の提出した「詩」と「戯」について次のように説明する。

劉半農は、『吟辺燕語』が戯考であるなら詩(文学的側面)の項のほかは戯(演劇的側面)の項についても触れなければならないのに、林紘はその区別をつけていないと批判したのである。98頁

瀬戸博士の説明は、普通の知識の持ち主には理解不可能の域に達している。

自分で「『吟辺燕語』はもともとイギリスの戯考であるのに」と翻訳している。どうして「戯考であるなら」という文脈に変更するのか。しかも「詩(文学的側面)」「戯(演劇的側面)」とはどういう意味なのか。それらに「触れなければならない」とは具体的に何をいっているのか。『吟辺燕語』という小説を漢訳した作品のなかで、どう「触れなければならない」のか。劉半農は、「豆と麦の区別がつかない」と書いて区別を問題にしている。「触れ」とどう関係するのか。疑問しか出てこない。まったく理解ができない文章だ。

しかし、その直後の部分に瀬戸博士独自の解

答が示されていた。

『吟辺燕語』序は“余今訳莎詩紀事”と『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概であることを明記しており、劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい。樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである。99頁

「林序」に出てくる「莎詩紀事」は、すなわち「『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概である」と瀬戸博士は書いている。劉半農はそれに気づいていた。瀬戸博士のいう「シェイクスピアの梗概」は、ラムの『シェイクスピア物語』にほかならない。劉半農は、『吟辺燕語』の原本がラム『シェイクスピア物語』だと知っていた。瀬戸博士は確かにそう述べている。

語るに落ちるとはこのことだ。瀬戸博士はそれまで注意深く隠蔽していたのに、すっかり本当のことを書いてしまった。劉半農が「林序」を読んで気がついたことならば、それを書いた林紓自身が莎劇と『シェイクスピア物語』を区別していることは明白ではないか。

劉半農はラム『シェイクスピア物語』を知っていた。普通ならば、林訳が小説になるのは当然ということになる。林紓は戯曲と小説の「区別がつかない論」が出てくる余地はない。

劉半農がはじめた林訳批判を見てほしい。批判の理由は、莎劇(詩)を漢訳して小説にしたことだ。劉半農がラム本を知らないことを前提にしてはじめて成立する。ラム名がないことだけを根拠にしてでっちあげた。それこそが林紓に対する冤罪だ。どうして「冤罪」説は出発から無理があるのである」という瀬戸博士の説明になるのか。意味不明。

そもそも「シェイクスピアの梗概」などと翻訳せずとも『シェイクスピア物語』に置き換えれば理解できる。

林訳ラム本を主題とする専門研究論文であり

ながら、瀬戸博士は基本的な用語の統一をしていない。これは、瀬戸博士のほどこした特別な工夫であることがわかった。

林紓は戯曲と小説の区別をつけていた。その事実を瀬戸博士は隠蔽しようとした。これが瀬戸博士の「林序」に出てくる訳語が不安定である理由だ。区別したことが理解できるように訳語を統一してしまっただけでは自分の考えを瀬戸博士自身で否定することになる。林紓は無知でなければならない。そう見えるように訳語をわざと混乱させあいまいにした。

だが、これは序の口にすぎない。頂点が待っている。

「誤った通説」の原因は林紓にある トンデモ説の出現

「誤った通説」(93頁)だと瀬戸博士はいう。

「林紓はシェイクスピアの戯曲を小説体で訳したとする通説が生まれ、それが長く通行した」(92頁)ことを指す。それが誤りであるという認識が瀬戸博士にはある。

あるいは、「鄭振鐸によって、林紓はシェイクスピア(およびイブセン)戯曲を小説化して訳したという通説が確立した。これが錯覚であったのは樽本氏の指摘の通りである」(100頁)のように「錯覚であった」というのだ。さらに、確立したのは鄭振鐸だという事実も認めている。

「林紓はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した、という従来の通説は正しくなかった」(101頁)

しかし、一転して「通説発生の主な原因は林紓にある」(97頁)と書く。驚くべき説明だ。

林紓は、底本とした『シェイクスピア物語』の編者ラムの名前を出さなかった。ここから瀬戸博士は不思議な論理を展開させる。それを根拠に次の主張になる。

林紓は、小説体に書き直されたラム『シェイクスピア物語』を訳すこととシェイク

スピア作品を訳することは同じではないことに、気がついていない。96頁

ラム名を出さなかったことが『シェイクスピア物語』と莎劇(詩)を区別していない理由となる。前に引用した「林紓が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」(94頁)と同様である。ラム名のないことが瀬戸博士によって問題にされている。

さらに、「通説発生の主な原因」だという。ところが、瀬戸博士は反対のことを別の箇所書いているのだ。

(注：Q本を底本にし)林紓はやはりシェイクスピア原作とのみ記したので、後に林紓はシェイクスピア戯曲を小説体に変えて訳した、と誤解されることになった。ラム『シェイクスピア物語』は著名であったので誤解の生じる余地はなかったが、クイラー・クーチは、当時の中国でほとんど知る人が無かったのである。72頁

「ラム『シェイクスピア物語』は著名であったので誤解の生じる余地はなかった」と書いて事実の認識が矛盾している。

ラムの名前を書いていない『吟辺燕語』は、劉半農と胡適が知らない風を装って最初から批判している。「著名であったので誤解の生じる余地はなかった」どころではない。

鄭振鐸が出てくる

すなわち、「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。『林紓はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した』という通説が形成された主要な原因は、林紓自身にある」(106頁)

と断定するのだ。とんでもない考えだといわなければならない。

「シェイクスピア作品ではないもの」

林紓がQの名前を出さなかった点を取り上げて同じ主張になる。

林紓は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである。96頁

シェイクスピア、イブセン作品ではなくなったものをシェイクスピア、イブセン作品として紹介した林紓…… 97頁

シェイクスピア作品ではなくなったものをシェイクスピア作品そのものとして翻訳紹介した事実…… 101頁

改編者の名前をださないことが莎劇またイブセン作品について無知である証拠だと瀬戸博士は主張する。

林紓は小説と戯曲の相違が理解できず、シェイクスピア作品の翻訳と物語化、小説化されたラム『シェイクスピア物語』の翻訳は別のことであることが認識できなかった。だから、『吟辺燕語』刊行にあたって林紓はただ莎士比亞<sup>マ</sup>原著とのみ記し、ラムの名を挙げなかった。71-72頁

ラム、あるいはQの名前がないことが、林紓の「区別がつかない論」を直接証明するという瀬戸博士の認識だ。

だが、「林序」を分析した結果、林紓はシェイクスピアとラム『シェイクスピア物語』の区別をつけている事実を明らかにした。Q改編のシェイクスピアにおいても莎劇(詩)そのものからの漢訳部分がかかなり占めてもいる。林紓は、莎劇(詩)と小説化した底本は区別している。ゆえに瀬戸博士の立論は成立しない。

もう一度引用して示す。瀬戸博士いわく「『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概であることを明記しており、劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい」

ラムの名前がなくとも劉半農は『吟辺燕語』が『シェイクスピア物語』であることを知っていた。劉半農は知っていながら知らないふりをして「豆と麦の区別がつかない」と林紓を嘲笑したのが事実だ。

ラム本を利用しながらラムの名前をださないシェイクスピア作品はある。瀬戸博士自身が紹介している。

(『女律師』) 林紓訳『肉券』に基づき包天笑が脚色したもの……74頁

申報掲載の上演広告には、「『女律師』は『吟辺燕語』中の『肉券』に取材し、英国莎翁の最も価値ある作品である」とある。76頁

文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亞所著」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている。77頁\*42

上の作品は、莎劇そのものではない。シェイクスピアといいながら、文明戯の多くは『吟辺燕語』に基づいて脚本化している。これらについて瀬戸博士は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」と批判しなければならなくなる。非難したか。文明戯関係者は特別扱いにして、林紓だけを批判するのであれば、それを一般に「二重基準」という。

清末民初の翻訳文学は、原作者を明記するものは一般にそれほど多くない。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」漢訳は、たとえば以下のようなものがある。

『盗花(言情偵探小説)』莎士比亞原著、頁少芹訳意 上海・文明書局 1916.6 / 1932.12六版

SHAKESPEARE “ King Henry the Sixth ” [民外0539]1916初版。原著為劇本、本書改訳為小説

「欧史遺聞・羅馬克野司伝」24(英) 莎士比亞原著、林紓、陳家麟同訳 『上海亜細亜報』1915.9.10-10.3

[古二徳15]WILLIAM SHAKESPEARE, “ CORIOLANUS, ” IN *HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE*, ED. A. T. QUILLER-COUCH, (LONDON: EDWARD ARNOLD, 1899), 9-38. (瀬戸108頁)「欧史遺文」と誤る。張俊才の目録にもなく詳細不明

「一斤肉」上海周樹奎桂笙(周桂笙)戯訳、南海吳沃堯野人(吳野人)編次 『新庵諧訳初編』下巻 上海・清華書局 光緒29(1903)孟夏

WILLIAM SHAKESPEARE “ THE MERCHANT OF VENICE ” (鄭志明) 英国蘭姆姐弟改編的莎劇故事「威尼斯商人」

「一磅肉(短篇小説)」皞、槩 『申報』1910.1.13-17

WILLIAM SHAKESPEARE “ THE MERCHANT OF VENICE ” [文外284] 文言短篇小説、節訳自莎士比亞的戲劇「威尼斯商人」

これらは一部にすぎない。すべて底本を明記していない。すると瀬戸博士のように「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」。瀬戸博士は、それらを批判したか。だが、それらが問題視されたことはない。

底本について明記する習慣のなかった時代の翻訳であることを知らなければならない。なぜ、

林紘だけが批判されるのだろうか。そちらの方が問題はより重大だ。

中国で発表されたシェイクスピア関連の翻訳をながめれば瀬戸博士の把握のしかたが独特であることがわかる。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」。これが林紘批判の出発点ではない。瀬戸博士は、まず林紘批判をすることを決めている。批判の理由はないかと探すと「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」ことが見つかった。そういう簡単な構造である。論理的な整合性があるわけではない。無理矢理でつちあげた口実にすぎない。

原書が明記されているのが望ましい。しかし、現実には書物に書かれていないことが多い。翻訳であるのに創作にしてしまうことは普通に見られる。逆の例もある。作者、訳者が自由にこなうことのできる時代だった。それを瀬戸博士は知らないのか。現代の尺度を清末民初に当てはめると誤りを犯している。

底本の特定は研究者がやるべきものだ。底本を書かなかった林紘に責任を押しつけてどうするのか。意味のないことだ。新しい発見のないそれは政治的文書であって研究とはいわない。

ラム本の日本語訳について瀬戸博士が著書にあげている作品(269頁)をふたつ紹介する。細かいところは補った。

翠嵐先生(鳴鶴藤田茂吉)訳述『(西基斯比耶叢書No.1) 仏国某州領主<sup>マキシム</sup>麻吉侯情話: As you like it』(東京・春夢楼1883.7)。

(樽本注)単行本未見。(セキスピア)、翠嵐生「春宵夜話」『郵便報知新聞』掲載。「緒言」1883.3.14より「ゼ・ウイントルス・テール」3.15-28、「As You Like It」4.5-5.1、「The two gentlemen of Verona」5.3-24、「ハムレット・プリンス・オフ・デンマー

ク」6.2-21。川戸道昭、榊原貴教編『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》1 シェイクスピア集』大空社1996.6.28 英国西基斯比耶(シェキスピーヤー)著、日本井上勤訳『(西洋珍説) 人肉質入裁判』東京・今古堂1883.10。

(樽本注)国立国会図書館近代デジタルライブラリー。また『明治文化全集』第14巻翻訳文芸篇、日本評論社1927.10.5所収

瀬戸博士は、自著269頁でそれに言及している。藤田、井上の両訳本には、どこにもラムの名前は見えない\*43。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」のが中国の林紘だけかと思えば、日本にも先例があった。ほかでもなく日本の瀬戸博士が日本人の翻訳を名指しして批判したのかわからない。それを聞かされた中国の聴衆は大いに喜んだだろう。

両者の違いは、中国の林紘は日本の瀬戸博士によって批判され、日本の翠嵐先生と井上勤は、日本の研究者からシェイクスピアに関係する重要な翻訳を行なったと尊重されていることだ。

鄭振鐸らは「誤解」「錯覚」にもとづいて林紘を批判したという。それですむのだろうか。

「文化大革命」を経て現在も林紘批判は続いているのだ。瀬戸博士の記述は、あまりにも無責任で軽すぎる。

加害者が被害者に成りすます

極め付きは次だ。「誤解」「錯覚」の原因を作ったのが林紘自身だから責任は林紘にある。ここまでくると瀬戸博士がくりひろげる論理は、一般人には理解がむづかしい。私は荒唐無稽な主張だと考える。瀬戸博士は、加害者と被害者の関係を意図的に逆転させている。

戯曲を小説化して漢訳したと濡れ衣を着せた加害者は、文学革命派だ。着せられた被害者は

林紘である。林紘は、戯曲を小説化して漢訳していない。小説をそのまま小説として翻訳した。やっていないことをやったと批判される。林紘にとっては冤罪にほかならない。事実に基づき林紘がこうむったこの冤罪という事実を瀬戸博士はどうしても認めたくないらしい。瀬戸博士の立場は、そこにはないからだろう。

瀬戸博士は、加害者の劉半農、胡適、鄭振鐸らを擁護し、被害者の林紘を攻撃している。瀬戸博士のいう「誤った通説」は、被害者の林紘に責任を転嫁したものにほかならない。

瀬戸博士によれば、誤解をさせた林紘が悪いことになる。誤解させられた劉胡鄭らに責任はないという。やってもいないことをやったと批判した加害者が、反対の被害者に成りすます。

これこそあの文学革命派の人々が林紘に対して実践した手口だ。

錢玄同と劉半農は「なれあいの手紙」によって林紘を攻撃した。しばらくして林紘が発表した短篇寓話小説2篇をつかまえて反対派からの攻撃だと針小棒大に宣伝した。はては陳独秀自ら軍閥からの圧力があるなどと風聞風説をまきちらして自分たちは被害者に成りすましたというやり方にほかならない。瀬戸博士は、中国の文学革命派の手法をそっくり模倣している。

どこか腑に落ちない。林紘は戯曲と小説の区別がついていない。これが主な問題だった。だが、瀬戸博士はいつの間にか底本作者の名前を出す出さないの問題に論点をすり替えている。加害者が被害者に成りすます。違和感がある。

瀬戸博士は林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する

被害者である林紘が、なぜ加害者に逆転してしまうのか。ここがいちばん不思議なところだ。

林紘は「林序」において莎劇とラム本を区別して単語を使い分けている。だが、瀬戸博士はそれをわざと曖昧に翻訳して放置した。意図したものと思う。林紘が莎劇とラム本を区別でき

ていない証拠とするためである。

瀬戸博士が次に取り出すのは、林紘に底本の作者名がないことだ。それについて瀬戸博士は、「林紘は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」と何度もしつこくくり返す。それが直接の原因になり鄭振鐸らの「誤解」「錯覚」を引き出した。底本であるラム本、Q本を明記しなかった林紘の方にこそ責任がある、と。

もう一度引用する。「林紘は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。『林紘はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した』という通説が形成された主要な原因は、林紘自身にある」(106頁)

瀬戸博士は、説明にまわりくどい言いまわしを採用し理解困難に導いている。了解するのは簡単ではないが、林紘に責任を転嫁していることはわかる。わざと不透明にしているのだろう。

しかし、ある単語を投入すると疑問が氷解する。「うそ」「虚言」である。

林紘は嘘をついた。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」。つまり、瀬戸博士は林紘を「嘘つき」と指摘している。しかし、「嘘つき」では林紘のこうむった冤罪の重さと時間的長さと比較して軽すぎる。また、「誤った通説」が中国の学界で80年以上も保持されている事実と釣り合わない。

そこで私は「詐欺」という言葉を使う。法律用語ではなく、普通の意味で「あざむきます」である。詐欺を行なった人だから詐欺師だ。瀬戸博士は林紘を詐欺師に認定している。瀬戸博士が説明する語句とその文脈から見てそれ以外に理解のしようがない。

私が瀬戸博士の思考経路を解説しよう。

林紘はラム本、Q本を漢訳したが、それをシェイクスピア作品であると偽って差し出した。

シェイクスピア作品ではない「偽物」だから、それは詐欺行為である。林紘は詐欺師、ペテン師だ。林紘は、劉半農、胡適、鄭振鐸らを騙した。劉胡鄭らは詐欺にあったのだから被害者である。まさに陳独秀ら文学革命派に独特の論理を模倣している。

日本の中国現代文学演劇研究の専門家が、被害者の林紘の方にこそ責任があるという。理由は詐欺師だから。瀬戸博士を除いては提出できないトンデモ説だ。中国の知識人を侮蔑するにも程がある。胡適にならえば、瀬戸博士は「林紘にとっての大罪人である」。

瀬戸博士はこの瞬間、林紘に対して新しい冤罪事件を引き起こした。しかも林紘の名誉にかかわる。

張俊才、王勇(2012)\*44は、錢玄同と劉半農が捏造した「なれあいの手紙」そのものが「林紘の人権と名誉権に対する侵害である(対林紘人権和名誉権的侵害)」(220頁)と述べた。

瀬戸博士がこのたび林紘を詐欺師に認定したことは、今までとは別の次元で林紘の名誉を毀損している。瀬戸博士がどう言いつくろおうともそれが事実である。

日本の研究者瀬戸博士が、中国の知識人林紘の名誉を毀損するのだ。前代未聞の事件が出来た。私は自分の目を疑う。

中国の学界では、今でも林紘を保守派の代表者だとして批判している。しかし、さすがに詐欺師とまでは言っていない。現代中国の学界でも思いつかないとんでもない珍説である。瀬戸博士の林紘に対する名誉毀損は、中国の研究者を超越した言説というべきだ。ぜひとも中国で紹介してもらいたい。瀬戸博士の意見に賛同する中国の研究者が出てくるかどうか。見物である。

瀬戸博士の文章は、新しい箇所といえば林紘を詐欺師に認定し彼の名誉を毀損したところだけ。それ以外に新しい発見は皆無だ。これほど無責任な文書を私は久しぶりに読んだ。

中国の知識人林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士のこの荒唐無稽な文書が、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇映像の国際的教育研究拠点『演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2008第1集』(2009.3)に掲載された事実は記録された。また、それを『中国のシェイクスピア』という単行本に収録したことも今後忘れられることはないだろう。

#### 余 話

胡適は林訳『吟辺燕語』に関する劉半農の批判が成立しないことを知って単語を修正した。鄭振鐸は、それを理解していた。だからこそ、後年、誰にも気づかれぬように証拠の作品を入れ替え、用語を「戯曲」と「小説」に変更したのだ。しかし、そのばあいも、林訳は莎劇(詩)あるいはイブセンの戯曲から直接漢訳したわけではないから、基本単語の変更には何の意味もなかった。鄭振鐸がその事実を知らなかっただけ。彼が林紘に濡れ衣を着せたのは本当のことだ。

鄭振鐸がほどこした細工についても、後の研究者は「中国現代文学演劇研究の末席に連なっている」(317頁)専門家の瀬戸博士を含めて誰も察知することができなかった。莎劇を小説に書き換えたと批判し続けた。これが現実だ。劉半農のばあいといい、鄭振鐸のばあいといい、研究者たちは目の前にある劉胡鄭の指摘がどう内容かを検討することはなかった。

私の「小説という虚構は、あらゆる制約から自由である。何をどのように書いてもよい」(103頁)は、創作の大原則を述べている。文脈がある。錢玄同と劉半農が『新青年』で発表した「なれあいの手紙」が捏造であるにもかかわらず、林紘の創作は許さない。それは矛盾しているから理解しがたい。そう説明しているだけ。

作品を発表したあとの評価は、その時の、あるいはそれ以後の社会と政治の状況によってど

のようにも変化する。中国の「文化大革命」を瀬戸博士はすっかり忘れてしまったようだ。創作の大原則は、その時々の評価とは別問題である。ましてや「三島由紀夫の『宴のあと』裁判（一九六一）はじめモデル小説をめぐる日本での各種のトラブル」とはなんの関係もない。創作の大原則を認めないで中国現代文学演劇研究はできるのだろうか。

林紵批判という結論が先にあり、それに合うように「林序」を読む。瀬戸博士は、そういう大勢のなかのひとりだった。

林紵を詐欺師と認定し林紵の名誉を毀損する瀬戸博士が次のようにいう。「樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである」。私は失笑するだけ。

瀬戸博士は、反論するためにだけ反論している。そればかりか瀬戸博士は次元の違う新しい冤罪事件を引き起こし林紵個人に対する名誉毀損まで行なっている。ここは注目に値する。

私は鄭振鐸を「評論の魔術師」と称したことがある。瀬戸博士は、林紵の無知を証明するために日本語訳をわざとあいまいにして提出した。誰も思いつかない林紵詐欺師説を作り出した。林紵評論にまつわる高等技術の保持者というしかない。瀬戸博士の方が鄭振鐸をある意味で上まわるといってもいい。詐欺師という単語を使用せず、それを知らしめる。虚偽をおおいかくし林紵を貶めるための荒唐技術である。一般人には理解が困難であるはずだ。負の方向に導く技巧を駆使する文章が日本において書かれ公表された。この事実は否定することができない。

どうぞ瀬戸博士には、林紵詐欺師説を主張し林紵の名誉を毀損しながら、劉半農、胡適、鄭振鐸らに対する強力で絶大な支持を今後とも永く継続してもらいたい。

錢玄同と劉半農の「なれあいの手紙」において林紵批判を実行したのが1918年だった。林紵の冤罪が明らかにされる2007年まで89年が経過している。林紵が死去した1924年から数えれば

83年間、劉半農、胡適と鄭振鐸たちが言いたてる「区別がつかない論」は研究者全員を欺き騙し通すことができた。それだけの効力があったことになる。それどころか、林紵冤罪事件を知らない研究者は、いまだに「区別がつかない論」をくり返し主張しつづけている。このたび日本の瀬戸博士によって林紵が詐欺師であるというトンデモ説とそれに関連して名誉毀損が加わった。ますますにぎやかだ。

#### 林紵冤罪事件 魯迅との関係

おさらいする。林紵批判は1918年に突然出現した。文学革命派の一員である劉半農が錢玄同（王敬軒は筆名）と仕組んで「なれあいの手紙」を捏造して始めた。王敬軒が林紵を「現代の文豪（当代文豪）」\*45と持ち上げ、劉半農がそれに反論し林紵には文学的意味はない、などと徹底的に批判するという段取りである。あらかじめそのように相談していた。

陳独秀、錢玄同、劉半農、胡適、魯迅周作人兄弟らが、林紵を打倒すべき保守派の代表的人物だと勝手に指名した。どういう情況だったかを説明する。

当時、文学革命派の言説が無視されたことはよく知られている。だからこそ錢玄同と劉半農は「なれあいの手紙」を捏造して林紵を批判し保守派の代表に指名し引きずり出したのだ。

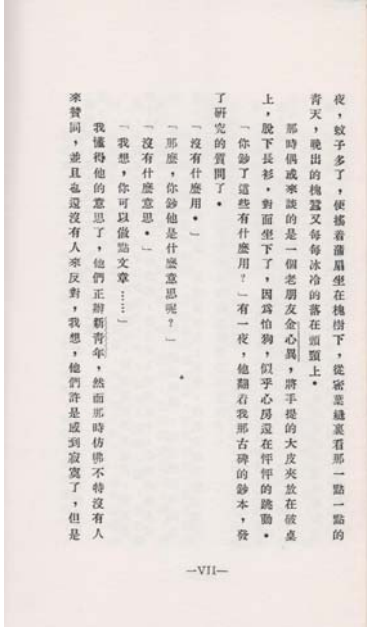
反応がないことを、劉半農は「なれあいの手紙」の冒頭で自ら白状している。

さて記者（劉半農）らが新文学を提唱して以来、反対する言論を聞くことができずまったく残念に感じていた。今、意外にもあなた（王敬軒＝錢玄同）のような老先生が「出馬（乗り出す）」してきた。これは極めて歓迎すべきことであり、非常に感謝しなくてはならないものだ。268頁 / 影印本310頁



こういうことを書くのが「なれあいの手紙」である。

当事者であった魯迅は、『吶喊』の「自序」で興味深いことを記している。古い友人の金心異がよく訪ねてきた頃の話だという。



彼らはちょうど『新青年』を発行していた。しかし、その時は誰も賛成してくれないばかりか、反対するものもない。だから、彼らはたぶん寂しさ(原文：寂寞)を感じていたのだろう、と私は思った。7頁\*46

林紵が書いた短篇小説「荊生」は、文学革命派を揶揄した作品だ。金心異は、その登場人物のひとり。銭玄同をモデルにしていると言われる。漢字の当て方からしてそうだろう。銭玄同こそ「なれあいの手紙」を執筆して林紵批判を発動した人物のひとりだった。林紵が後に発表する短文の中で創造した人物名を魯迅は時間経過を無視してわざわざここで使用している。特別の意図があるのは明白だ。魯迅の「自序」、特にこの部分には、林紵批判を実行したなれあい芝居が色濃く影を落としていることがわかる。魯迅は当時の状況を説明してとても生々しい。

ことの経緯を順にあげる。

- 1 銭玄同(王敬軒名を使用)と劉半農のなれあい芝居は、1918年3月15日の『新青年』第4巻第3号に掲載された。
- 2 胡適が林紵をシェイクスピアにとっての大罪人だと批判した。『新青年』第4巻第4号(1918.4.15)だ。
- 3 魯迅が銭玄同に勧められて「狂人日記」を発表したのが『新青年』第4巻第5号(1918.5.15)だった。
- 4 金心異(銭玄同)が登場する林紵の「荊生」は、『新申報』1919年2月17-18日に載った。
- 5 そして魯迅の『吶喊』「自序」の署名日付は1922年12月3日である。

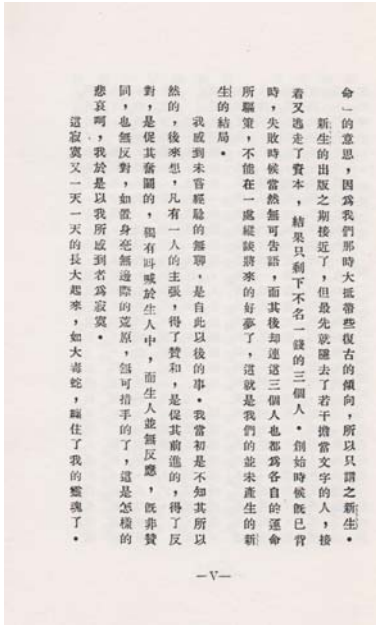
林紵批判開始から魯迅の「自序」まで約4年の時間しか経過していない。

出来事を以上のように時間順にならべてみれば、魯迅の5「自序」に金心異の名前が出てくる異常さがわかる。すなわち、3の「狂人日記」執筆以前に会っていたころの銭玄同が金心異と呼ばれていたはずがない。それにもかかわらず後の4「荊生」でようやく出てくる金心異をわざと使った。魯迅が時間経過を歪めてまで金心異の名前を登場させたのは、林紵批判事件に関連するからだ。特別の意図がある、と私がいう理由だ。

文学革命派は、『新青年』を中心に文章を発表する。だが、賛成するものも、反対するものも出てこない。敵を求めて得ることができない。まったくの無反応であったことを魯迅が述べている。彼の実体験だった。文章の雰囲気深刻さをただよわせている理由だろう。

魯迅は、いかにも傍観者のように書いている。だが、事実は魯迅自身も林紵批判に直接関係していた。

魯迅のいう「寂しさ(寂寞)」については、別の箇所次で次のように説明している。



およそひとりの人の主張というものは、賛同をえればその前進がうながされるし、反対にあえばその奮闘がうながされるのだ。見知らぬ人の中でただ大声で叫んでみても、見知らぬ人は反応しない。賛同するわけでもなく、反対もしない。まるで際限のまったくない荒野に身を置いたようで、なすすべがない。これはなんと悲しいことだろうか。私はそこで私が感じたものを寂しさ(原語:寂寞)と考えたのだった。5頁

この文章が特異なのは、「反対にあう(得了反対)」ことを重視しているところだ。反対があればそれに反発して奮闘できる(是促其奮闘的)。バネとするための役割を積極的に認めている。

文学革命派は反応のない現実に直面していた。彼らは、自分たちが感じていた「寂しさ(寂寞)」を打破することができない。魯迅はここで「なすすべがない(無可措手的了)」と書いた。いかにも無力で立ちつくしているように描いている。それは事実ではない。文学革命派は「なすすべがない」どころか事態打開のための確かな手段を持っていた。なれあい芝居を捏造するという方法である。

敵がいなければ動きがとれない。だが、自分に敵対する者がいれば、それに反対することで力を発揮し奮闘できる。敵の存在こそが彼らには不可欠だった。どうしても敵対者に出てきてもらわなければならない。王敬軒をでっちあげ、林紵を称賛する。劉半農がそれに反論する。手間をかけた戦法だ。その目的は、出てこない自分たちにとっての敵を自力で引きずりだすことだった。

彼らが敵に指名したのは、数え年六十七歳の老知識人林紵だ。無理矢理であろうがなかろうが、彼らの敵が林紵だとうやく明確にした。「自序」を読めば、魯迅はそう説明しているのとかわらない。金心異という林紵がらみの名前を使ったのがその証拠である。

文学革命派は、林紵を無知だと非難した。「詩」と「戯」、さらに「戯曲」と「記叙体」、のちに「小説」と「戯曲」の区別がつかないと攻撃した。自らの運動を推進するために、当時彼らにはそうする必要があった。しかし、林紵にしてみれば身に覚えのないことだ。原作が小説である外国作品のラム本を漢訳して小説になるのは当たり前ではないか。とって、林紵らがそう反論することはなかった。基本的態度は、無視することだった。林紵が「荊生」という揶揄小品を発表したのは、なれあい芝居からほとんど1年近く後のことだ。それほど反応のない時間があつた。

#### 「林紵を罵る快樂」

文学革命派の人たちにとっては特別に意味のある林紵批判だったことはわかる。

だが、後の秀逸な研究者たちについては、理解しにくい。学力に優れた人たちだから、資料と先行文献を熟読しただろう。自分で深く考えたに違いない。ところが、提出されたその結果に私は物足りなさを感じざるをえない。「林序」において林紵が注意深く区別して使用した用語をそのままに読もうとはしなかったからだ。

彼らは劉半農から胡適をへて鄭振鐸に継承された根拠のない林紘批判を受け入れて林紘を非難攻撃し嘲罵した。林紘批判の結論が先に決まっているからだとわかる。林紘批判で思考が固定されたままなのだ。すでに下された評価をそのままくり返すだけ。非難攻撃の文句を複写して終わりだ。私はそれを「林紘を罵る快樂」と表現している。ただ、中国には中国特有の事情があるかもしれない。

残念なのは、学問の自由を享受しているはずの海外の秀でた研究者たちだ。「瀕外奇譚叙例」に使用されている単語について漢訳者がどこした説明を読もうとはしない。自分の考えを押しつけて解読し、誤る。また、『吟辺燕語』「林序」を熱心に読んだはずだが、これも恣意的に解釈し、当時の中国の知識人である林紘たちには知識がないと批判した。私の知る限り例外なく、鄭振鐸らが実行した誤った林紘批判に便乗し同じように林紘を非難攻撃したのである。戯曲を小説に書き換えた、とことあるごとに罵った。無実の罪を着せつけた。まるで目に見えない何かの法則に支配されているかのようにも思える。日本の瀨戸博士にいたっては、林紘に詐欺師の濡れ衣をきせて林紘の名誉を毀損している。

以上、漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序2種類を検討した。確認できたのは、莎劇が詩であり、ラム本が散文であることを漢訳者たちは明確に理解していることだ。

そうすると、今までの研究はなんだったのかという疑問、懐疑が生まれてくる。研究者たちが真摯に序文を読んだ結論が的外れなのだ。あらかじめ下されている批判的な結論をそれらの序文に当てはめ、利用できると思われる部分を自由に選択し組み立てているだけ。ラム本の漢訳者は誤解していると一方的に非難している。中国の当時の知識人に対する評価がきわめて低い。それはどう考えても正しくない。

研究者たちが当時の著名知識人林紘らを一方

的に否定し続ける状態がこれほど長年にわたっているのはどういうことだろうか。林紘の名誉を毀損する瀨戸博士が新しく提唱する林紘詐欺師説も見逃すことはできない。大きな疑問を感じる。 罫

【注】

- 35) 胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15
- 36) 神田一三「早期漢訳ドーデ「最後の授業」 胡適訳「最後一課」のばあい」1-4『清末小説から』第112-115号 2014.1.1-2014.10.1
- 37) 徐錦TSUI KAM JEAN, *REWRITING SHAKESPEARE: A STUDY OF LIN SHU'S TRANSLATION OF TALES FROM SHAKESPEARE*. THE UNIVERSITY OF HONG KONG, 2008.8 電字版
- 38) 阿英「翻訳史話」第4回『小説四談』上海古籍出版社1981.12。244頁。執筆は1938年
- 39) 呉慧堅「文学翻訳の価値：以“詩意”開啓原作的新旅程 従本雅明的翻訳觀看莎士比亞作品漢訳」『広東教育学院学报』第29巻第1期2009.2 電字版 91頁
- 40) 鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号 1924.11.10
- 41) 劉半農「文学革命之反響」『新青年』第4巻第3号 1918.3.15
- 42) 瀨戸博士は、同じ文章を使いまわしている。次の128頁も同文。瀨戸宏「第五章 六大劇団聯合演劇の考察 文明戯の最盛期」『中国話劇成立史研究』東方書店2005.2.25
- 43) 参考：富原芳彰「『該撒奇談』に関する覚書」『一橋論叢』第50巻第1号 1963.7.1 電字版。「逍遙の『該撒奇談』が出る前の年、明治十六年には、有名な井上勤訳『人肉質入裁判』〔『ヴェニスの商人』〕と「翠嵐先生記述」の『(西基斯比耶叢書 No.1) As you like it 仏国某州領主麻吉侯情話全』と出ている。以上に挙げた訳者たちも、シェイクスピアの原文に目を通してはいたであろうが、かれらが実際に翻訳するにあたっては、ほとんどすべての場合、ラムの『シェイクスピア物語』が底本をなしていたことがうかがえる。」45頁 / 柳田泉

『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻  
春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷。41-42頁。「明  
治十六年 ……春宵夜話(後閑話)翠嵐生 報知新  
聞ノラム「シェークスピア物語」の紹介、翠嵐とは  
藤田鳴鶴の戯号なり。 ウイントルス・テール As  
You Like It. ヴェロナの二紳士 ハムレット」471  
頁

44) 張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紘の困  
惑与堅守』太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版  
社2012.1

45) 「当代文豪」は商務印書館「林訳小説叢書」の広  
告(『教育雑誌』1914.7.14)に使用された語句。ヒ  
ルMichael Gibbs Hillの指摘による。Michael Gibbs  
Hill, *LIN SHU, INC., Translation and the Making of  
Modern Chinese Culture*. Oxford University Press, 2013.  
211頁。広告写真あり。

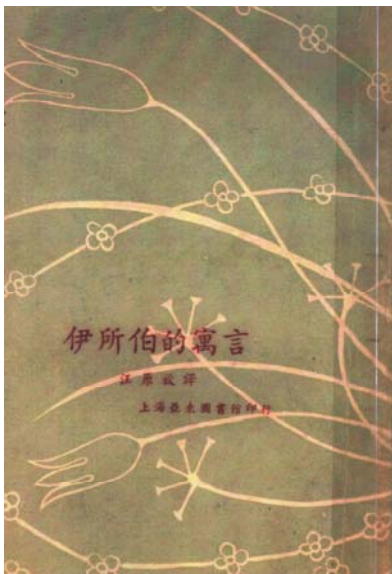
46) 魯迅著、周作人編『呐喊』新潮社1923.8 文藝叢書。  
7頁

【参考文献】

小澤康彦「ラムについての同時代批評 『シェイク  
スピア物語』など子供有向けの作品をめぐって」  
『イギリス・ロマン派研究』第16号 1992.3.20

鄭 鈺「愛情与契約：重読林紘の訳作《吟辺燕語》」  
原載『語文学刊』2006年第10期、「林訳と“林訳  
小説”」) 陳錦谷編輯『林紘研究資料選編』上冊  
福建省文史研究館編2008.6

沢本香子「『吟辺燕語』批判の謎」『清末小説から』  
第111号 2013.10.1



(図1) 影印本表紙

いくたびかの阿英目録15

樽本照雄

汪原放訳『伊所伯的寓言』の底本

イソップ寓言集は、阿英目録に収録されてい  
ない。小説ではないからだろう。とはいいいなが  
ら、アラビアン・ナイトは見える。判断のむつ  
かしいところだ。

汪原放訳『伊所伯的寓言』(上海・亜東図書  
館1929.1初版未見、影印本あり(図1))である。

イソップ寓話の漢訳本だ。書名に林訳からは  
じまる著名な『伊索寓言』を使用していない。  
イソップに「伊所伯」を当てたのは汪原放独自  
の判断だろう。

該書の構成は、次のとおり。

「訳者的話」8頁、「原序節訳」6頁、「伊所  
伯伝」6頁、「音訳専名釈義」3頁、「伊所伯的  
寓言目録」11頁、本文327頁、全313話、挿絵  
114点。

汪原放は、その「訳者的話」で底本について  
明記している。「ジョージ・ファイラー・タウ  
ンゼンド(George Fyler Townsend 喬治弗萊棠  
生)の英訳本により翻訳した」(3頁)。刊年不記  
本らしい。出版社名には触れない。

底本はタウンゼンド本だという。それだけ。  
もう少し説明があってもよかった。

なぜなら、タウンゼンド本といっても総合的にいえば3種類があるからだ。収録した寓話と挿絵の数が異なる。

1 REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A.  
*THREE HUNDRED ÆSOP'S FABLES.*

(WITH FIFTY ILLUSTRATIONS BY  
HARRISON WIER) LONDON: GEORGE  
ROUTLEDGE AND SONS, 刊年不記  
(1867?) 電字版

2 REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A.  
*THREE HUNDRED ÆSOP'S FABLES.*

( WITH ONE HUNDRED AND  
FOURTEEN ILLUSTRATIONS )  
LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND  
SONS, 刊年不記(手書きで1867) 電字版

3 REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A.  
*THREE HUNDRED AND FIFTY ÆSOP'S*

*FABLES.* (WITH ONE HUNDRED AND  
FOURTEEN ILLUSTRATIONS,  
DESIGNED BY HARRISON WEIR, AND  
ENGRAVED BY J. GREENAWAY.)  
CHICAGO: BELFORD, CLARKE & CO.,  
1882 電字版

1は、いわゆる300本(313話収録)だ。挿絵50点を収録する。

2は、いわゆるタウンゼンド300絵114本。寓話の数は同じ。挿絵を50点から増やして114点を収録。

3は、いわゆる350本(352話収録)。挿絵はそのまま収録寓話を増加させた。

汪原放漢訳本が拠ったのはタウンゼンド300絵114本だ。上記3種類のうちの2に相当する。収録する寓話の順序と挿絵からそうだとわかる。

タウンゼンド本と汪原放本の相違を簡単な表にする。

223頁にあるべき「驢子和狼」が227頁へ移動している。原話はp.153 THE ASS AND THE WOLF.

280頁「老鴉和狐狸」と281頁「狗們和牛皮」が前後入れ替え

283頁「牧人和羊」と284頁「猴獅和駱駝」が前後入れ替え

266頁「驢子和馬」と297頁「母親和狼」が前後入れ替え

299頁「狐狸和荆棘」と300頁「鷓鴣和捉鳥的」が前後入れ替え

301頁にあるべき「狗和蛎壳」が303頁へ移動している

308頁「獅子和牧羊的」と310頁「毒蛇和銼刀」が前後入れ替え

同じタウンゼンド本を底本にした以下の漢訳本がある。

林訳『伊索寓言』(1903)は、タウンゼンド300絵50本を底本とする。全300話を収録。原書にある13話は未掲載。挿絵は原書から採録していない。英語学習書、国語学習書など別の刊行物からの孫引きですませた。

孫毓修『伊索寓言演義』(1915)は、タウンゼンド300絵114本にもとづく。寓話は、選択して133話を収録。挿絵は、原書のものを主とするが、別のイソップ寓話集より引用したのものもある。

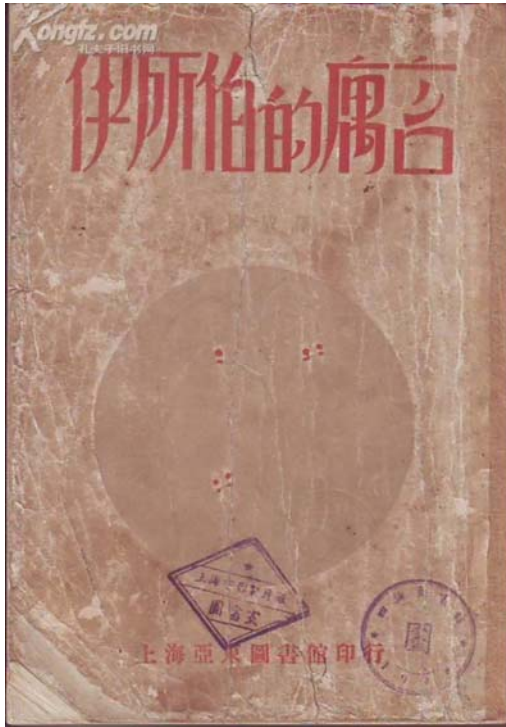
日本には、タウンゼンド300絵50本を翻訳した田中達三郎訳本がある。313話の完訳だ。

希臘伊蘇普原題、英国都運箋士直訳、日本若菜蝴蝶校正、田中達三郎訳『伊蘇普物語』

1888.3.10 / 1896.9.2訂正八版 / 国文学研究資料館2012.12.3リプリント

国立国会図書館デジタルコレクションには、同書のたぶん初版(明治廿一年四月四日出版)が収録されている。

なお、汪原放漢訳本には、同年同月の奥付でありながら別の表紙をつけた版もある。



孔夫子旧书网の写真で見たが、実物では確認していない。

こちらの表紙と奥付をかけた張沢賢『中国現代文学翻訳版本聞見録1905-1933』(上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.6. 282-285頁)がある。ただし、表紙が2種類あることに言及していないのは残念なことだ。また、「訳者的話」を引用しているからタウンゼント本であることはわかる。タウンゼント本のどれかについては説明がない。 罫

## 新しい「説部叢書」研究

神田 一三

商務印書館版「説部叢書」について研究論文を発表する研究者は多くない。その状況については過去に説明した。今回は、比較的新しい中国語論文2本を取りあげ紹介評論する。

論文を紹介する前にいままでの研究の様子を簡単にのべる。概略を知ることが、この2本の研究水準を理解する助けになるだろう。

商務印書館版「説部叢書」をめぐって

商務印書館版「説部叢書」とは、翻訳文学シリーズ(叢書)だ(以下、商務印書館版は省略する)。海外小説の漢訳を中心に収録してある。清末民初時期に300編をこえて大量に刊行された。これほどの多種類を叢書としてひとつの出版社が最初に継続刊行した。そういう例は、当時の中国にはなかった。画期的だったといっている。のちに著名な作家となる人々が海外文学を知る契機となったことでも知られる。魯迅、周作人兄弟はそれらを読んだばかりではない。自分たちで翻訳した作品が、当の「説部叢書」に収録されてもいる。

「説部叢書」は大いに売れた。商務印書館の経済的基盤を強化するのに貢献したと思われる。重印の版数がとても多いところからそうと理解できる。商務印書館は、商業用印刷からはじめ

教科書の編集出版を基盤にしていた。そこから他分野へ事業展開をはかっていた商務印書館にとって、「説部叢書」は一般書刊行分野における重要な叢書のひとつだ。

実物を見れば主として薄い冊子だ。背表紙に書名もない。紙質、製本ともに上質とはいいいにくい。表紙と奥付を後から張りつけた平装本であるのは大量販売には向いていた。だが、それは同時に長期保存がむづかしい原因となる。その体裁からして消耗品として扱われたような印象を受ける。数が多く出まわったのもその要因のひとつかもしれない。私が故中村忠行先生から聞いた話では、戦前の台湾では薬屋の景品として「説部叢書」が配布されていたという。1冊2冊と購入していると徐々に売値が高くなったそうだ。

「説部叢書」は有名であるにもかかわらず、その成立過程については不明な部分が多い。

商務印書館からして自社の叢書であるにもかかわらず詳細な記録を残していない。どのようにして成立したのかを説明したことがない。社内に研究職の社員はおおぜいいるはずなのに不思議なことだ。また、翻訳小説の叢書であるにもかかわらず各作品の詳細、たとえば原作、原作者について注記しない。『商務印書館図書目録(1897-1949)』(1981)には部分的な注記がある。だが以前に刊行した自社目録を写しているだけ。間違ったものが混じっている。それを訂正することもしない。さらには、該目録にある書籍はすべて刊年不記である。これでは昔の販売用広告だ。出版社の刊行する図書目録ということはできない。研究資料としては信頼性に欠けるといわざるをえない。残念なことだ。

困った例を示す。困ったとは、読者に誤った印象を与えるという意味だ。商務印書館社史に「説部叢書」の写真を掲げるものがある(図1)。

説明文は「《説部叢書》(1903)：周卓訳《紅星佚史》(1907)」とわずか1行にすぎない。だが、説明の字句が掲げた写真と一致しな



《説部叢書》(1903)：周卓訳《紅星佚史》(1907)

図1 『商務印書館百年大事記』1997

い。その結果は、読者を惑わせる。

1903と書いている。刊行を開始した年を意味する。当然、そこに掲げてある赤色リボン文様の表紙が最初の装丁だと普通に思う。だが、リボン文様になったのは1913年の初集本からだ。年代が間違っている。1903年と書くのであれば該当年の「説部叢書」を掲げるべきだ。それが無い。説明文の周卓は周達の誤り。周作人と魯迅の共同筆名だと注するのがよい。また『紅星佚史』に1907と記す。1907年に刊行された『紅星佚史』の表紙は写真のものではない。少なくとも「説部叢書」元版第八集第八編にはそれとは違う意匠＝タンポポ文様を使用していた(図2)。



図2 ウェブより引用

だがそれを示さず説明もしない。写真にある「説部叢書」初集第78編は1913年以降に出版したものだ。

以上のとおり百周年記念誌であるにもかかわらず、整理して正確に記述するという姿勢が見えない。

すでに失われた出版社であれば、詳細が不明であるのもしかたがない。だが、商務印書館は現存している。世界的に見て著名な大出版社だといっていい。だが、それにしてはいかがかと思うくらい「説部叢書」についてその扱いは無責任である。

清末民初時期の翻訳を紹介する論文は、必ずといっていいくらい「説部叢書」に言及する。ただし、それが刊行されたというだけを述べるものが多い。くり返すが、版元そのものが叢書全体の詳細を把握していないことも原因のひとつ。

陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014.1)は、「説部叢書」を注記しながら基本である元版と初集の区別(後述)をつけることができずに誤る。

「翻訳小説は中国文学ではない」そうやって翻訳小説研究をおろそかにしていた。それがついこのあいだまでの中国学界の実状だ。そういう状況下では研究者は少なかった。また、利用できる資料に限られるのもしかたがないだろう。

利用できる資料というのは、「説部叢書」そのものが主になる。参照できる先行論文は日本を除いて多くない。

そこで発生するのが、資料と研究という2項目だ。

「説部叢書」を資料として収集するのは研究の基礎である。いうまでもない。見ないで論文を書く研究者はいないだろう(たぶん)。

全冊(元版とのちの初集本)を完全に所蔵する個人は、どこかにいるのだろうか。いるのだろうかに聞いたことがない。だからこそ、個人的に収集した「説部叢書」を披露したくなる

らしい。しかし、数多く収集すればそれが研究になるかといえば、そうはならないからむつかしい。どういうことかといえば、「説部叢書」としてこういう作品が刊行されました、と書名をあげるだけでは研究とはいえないからだ。それほど簡単ではない。

一方で地道な研究が継続されているのも事実だ。「説部叢書」収録の各作品について現在まで判明している研究成果のすべてを反映するように努力している目録である。樽本照雄編『清末民初小説目録X2』(2016ウェブ公開)がある。普通の図書目録が明記しない原作、原作者を可能なかぎり記載する。工具書として利用することができる。

先に触れたように、「説部叢書」そのものの成立過程が複雑である。複雑であるからこそ私は興味を覚える。そこに問題があることを認識する人は少ない。謎を解明しようとする研究者が少ない理由のひとつになっている。

読者の理解を助けるために、成立の基本構造について分かっていることを簡単に紹介しておく。

#### 「説部叢書」の成立

基本的知識として「説部叢書」には元版とこの初集本という2系統があることを理解するのが重要だ。

それを最初に指摘したのは、1981年の中村忠行論文(以下、中村1981とする。詳細は「参考文献」を参照のこと。以下同じ)だった。元版、初集本という用語は、中村が該論文で使用した。私はそれを継承している。

この元版と初集本に解明すべき問題が集中している。ここでいう問題は、謎といってもいい。複雑でなかなか理解することが以前はむつかしかった。

商務印書館は、最初、翻訳書を独立した個々の作品として刊行していた。書籍広告のなかでは普通名詞の説部叢書を使いそこにまとめて表



示していただけ。ここの説部叢書は叢書名ではない。

1903年11月19日から商務印書館は日本の金港堂と正式な合併会社になった。前年の1902年あたりで両者には関係がすでに生じていたのが事実だろう。商務印書館は失火をし、金港堂には教科書事件があった。そのため正式合併が予定よりも遅れた。叢書の創設には、合併以前に金港堂から助言があったのかもしれない。

1903年、シリーズ名として「説部叢書」があたりめて付与された。すでに刊行していた翻訳のうち対象を海外小説に絞りそれらを集める。集編番号を振って組織化する方向に動きだす。一集に10編を収録し全十集で合計100編になる。これが元版である。1905年、それまでばらばらだった表紙をタンポポ模様に統一した(図3『佳人奇遇』)。

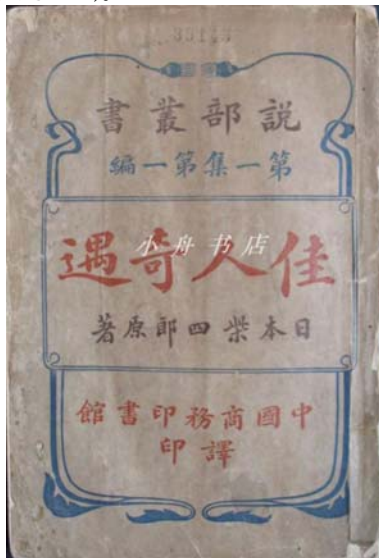


図3 元版 孔夫子旧书网より。奥付なし

1908年、改組して一部作品の入れ替えを行ない同年内に元版十集全100編は完結した(後述)。それを箱詰めにして販売もしている。合併を解消する直前の1913年に「説部叢書」は初集と改称し第1編から第100編までの通し番号に振り直した。また、表紙をリボン文様に変更もしている。1914年1月6日、商務印書館は金港堂と

の合併を正式かつ秘密裡に解消した(それを報告する商務印書館株主特別会議は1月31日開催)。実質10年間の合併事業だった。その合併解消を記念してリボン模様の初集本を再版する。現在よく見かけるのがこの初集再版本だ。先に説明した商務印書館百周年記念誌に掲載している写真がそれである。その後、継続して2集100編、第3集100編を刊行し第4集第22編をもって1924年に完結した。

本稿では2系統を区別するために元版の集数には漢数字(例:第一集、第二集など)を、初集以降にはアラビア数字(例:2集、第3集など)を使用する(注:2集は第2集ではない。初集は表紙に「初集」と表示し、2集は「二集」である。それ以降は「第三集」「第四集」だ)。

#### 研究の状況

今でこそ、以上のように要点を説明することができる。だが、中村1981が公表される以前は刊行状況についてはほとんど不明だった。だいいち、「説部叢書」を専門に論じたのは中村1981が世界で最初だったことをいわなくてはならない。それを受け止め日本で研究が継続された(樽本2016に収録)。

中村1981を読まない研究者が迷走するのはしかたがない。そこにある変遷の道筋が理解できなければ、「説部叢書」そのものをいくら収集したとしても研究にはならない(陸昕2001、黄惇2008など)。それだけで終わらせないためには工夫が必要になる。たとえば、不明である原作品と原作者を特定するならば研究になりうる。単にこういう翻訳作品があります、といっただけでは不十分であるのはいうまでもない。

#### 鄭方曉の研究

鄭方曉2013は、博士論文として書かれた。

専門論文ならば中国では付建舟の文章が先行する(後述)。だが、博士論文として「説部叢

書」を主題とするのは珍しい。以前はなかった。もしあるのならばご教示いただければうれしい。目次を示して全体の構成を示す。

- 第1章《説部叢書》的数量与版本系統
- 第2章《説部叢書》の分類与範圍特点
- 第3章《説部叢書》作品的個案研究(注: 佳人奇遇、夢遊二十一世紀、華生包探案)
- 第4章《説部叢書》の編訳隊伍
- 第5章 結語
- 附 録《説部叢書》系列目録(注: 此表根據(日)樽本照雄著《新編清末民初小説目録》相關条目整理)

商務印書館について創業からの歴史を記述する部分がある。鄭方曉は、付建舟が提出した用語「十集系列」「四集系列」を使用している(35頁)。「十集系列」とは先に示した元版のこと。統合して元版(十集系列)と称する。「四集系列」とは後の初集以下をさす。初集本(四集系列)と書く。

私が鄭方曉論文に興味をおぼえたのは次の2点だ。

- 1 「説部叢書」の総数を324編とする。
- 2 十集系列から四集系列へ移行する初集の最初の形態があることを示す。

1の総数については以前から322編だと私は指摘している。過去において数字を示して340種、<sup>ママ</sup>220多部[320多部]、323種などという人がいた。私が322編とする根拠は簡単だ。初集100編、2集100編、第3集100編、第4集22編を合計すれば322編になる。それだけのことだ。

鄭方曉は324編と書いて2編が増える。その理由は、元版(十集系列)の作品入れ替えにある。私が補足説明すれば1908年に実施された改組のことだ。第一集第一編『佳人奇遇』は『天際落花』に、第二編『経国美談』は『劇場奇

案』に差し替えられた。第一集の10編という表面上の数には変化がない。しかし入れ替えがあるのだから実質は12編が存在している。その2編を数えれば322編プラス2編の合計324編になる。

なるほど、鄭方曉のような数え方も成立する。しかし、私の考えは少し違う。元版(十集系列)についてのみ「全100編(実は102編)」と説明するのが適切だ。

初集本(四集系列)は元版(十集系列)とは別に成立したと考えるからだ。初集本(四集系列)には最初から『佳人奇遇』と『経国美談』は収録されていない。こちらは全322編のままでもいい。

両者は関係があるのだからどうしてもそれを反映させたいというのであれば「全322編(元版(十集系列)を含めれば実質は324編)」と説明することも可能だ。

2で鄭方曉がいう「初集」の最初の形態が存在していたことははじめて知った。今まで提示した人はいない。

以前、元版第一集第八編『金銀島』(光緒三十年九月首版)という奇妙な版本があることについて書いたことがある。付建舟、朱秀梅『清末民初小説版本経眼録』(上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6。30頁。記号は[付朱])に写真が掲載されたのが最初だろう。現在、元版『金銀島』は影印本で入手できる。

元版第一集第八編は本来、『英国詩人吟辺燕語』(光緒三十年七月首版/光緒三十一年三月再版/光緒三十二年四月三版)の集編番号だ。ゆえに『吟辺燕語』はのちに初集第8編になる。

『金銀島』はそれと重複してしまう。発行月を見れば『吟辺燕語』よりも二ヵ月遅れていながら集編番号を先行書物に重複させた。だから奇妙だという。『金銀島』は普通元版第二集第一編に配置される。そこから初集第11編に組み込まれて編番号に矛盾はない。ゆえに元版第一集第八編とする『金銀島』の集編番号はなにか



図6 奥付



図5 扉

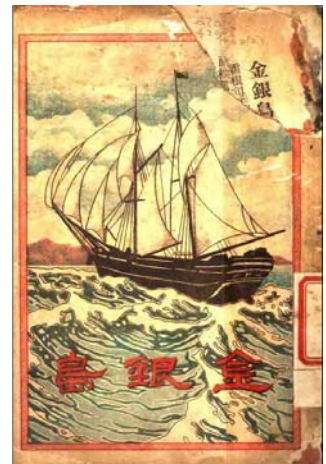


図4 元版タンポボ文様以前の表紙  
付建舟氏に感謝 [付朱30]を参照のこと

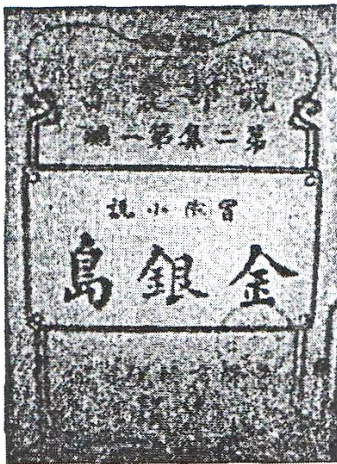


図8 元版タンポボ文様 鄭方曉論文  
より 写真不鮮明はもとのまま



図7 鄭方曉より  
写真不鮮明はもとのまま

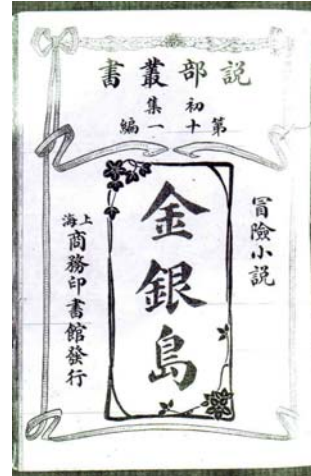


図9 初集初版 表紙

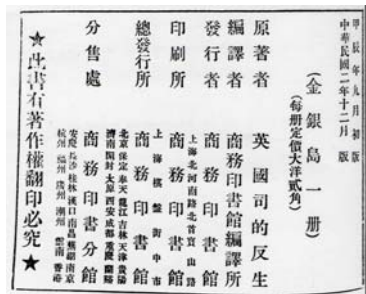


図10 初集初版 奥付拡大



図12 初集再版 奥付拡大



図11 初集再版 表紙

の手違いによる誤植だろう。商務印書館の「説部叢書」管理はそれほど厳格ではない。普通、集編番号を間違えるだろうか。

それとは違う種類の版本が存在することを鄭方曉は指摘している。集編番号を誤植する『金銀島』を含めて順序を入れ替えて示す。

『金銀島』光緒三十(1904)年九月首版  
第一集第八編(50頁)

説明：鄭方曉は2系列以外の系統かという。違うだろう。これについて私は上述のように誤植だと指摘しておいた。元版の表紙は絵図(図4)だ。タンポポ文様に統一される前のもの。扉(図5)と奥付(図6)を示す。

『金銀島』中華民國三年(1914)四月再版  
第一集第一一編(49頁)

説明：写真あり(図7)。表紙はタンポポ文様。元版(十集系列)だから「第一一編」などあるはずがない。しかし、ないものが実在する。元版(十集系列)第二集第一編のタンポポ文様を参考までに示す(図8)。

初集第11編はある。リボン文様 初集第11編 甲辰(1904)年九月初版 / 中華民國二(1913)年十二月版(図9、図10) / 初集再版 甲辰(1904)年九月初版 / 中華民國三(1914)年四月再版(図11、図12 孔夫子旧書網より引用)

以上を变化の順に示す。

元版第一集第八編(誤植 図4、5、6)

元版第二集第一編タンポポ文様(図8)

(新出)第一集第一一編タンポポ文様(図7) 初集第11編リボン文様(図9、10、11、12)

『回頭看』乙巳(1905)年二月初版 / 中華民國二年(1913)十二月再版 第一集第一二編(48頁)

説明：写真あり。表紙はタンポポ文様。

タンポポは元版(十集系列)だから「第一二編」があるはずはない。しかし、ないものが実在する(写真不鮮明のため掲げない)。

初集第12編はある。リボン文様 初集第12編 乙巳(1905)年二月初版 / 中華民國二(1913)年十二月版(図13)



図13 奥付拡大

『迦茵小伝』奥付なし 第一集第十三[一三]編(51頁)

説明：写真なし。『金銀島』と『回頭看』がそれぞれ「第一一編」「第一二編」だから、『迦茵小伝』も同様に「第一三編」という記載だと推測する。「第十三編」ではないだろう。

初集第13編はある。リボン文様 初集第13編 乙巳(1905)年二月初版 / 中華民國二(1913)年十二月版(図14)



図14 巻上表紙

説明で書いたようにタンポポ文様は元版(十集系列)で使用された。あくまでも各集10編の範囲におさまるものだ。普通ならばそれを超えて第一、一二、一三編となるはずがない。ないはずのものが存在するから不思議に思う。

上に見るのは1913年、1914年の刊行物だ。時期的に言えば、商務印書館が日本金港堂と合併を解消する前後と重なる。

事実をたどれば「説部叢書」元版(十集系列)は、1913年に初集と改称し編数は第1-100編の通し番号に変更した。同時に表紙をリボン文様に一新した。前述のとおり1914年1月に合併解消が正式に成立する。それを記念してリボン文様初集100種を再版した。複雑な重版状況が奥付の刊年表記に反映されている。ちょっと見ただけではその変遷を理解するのはむづかしい。

問題になっている元版タンポポ文様の規格外『回頭看』『金銀島』『迦茵小伝』のいずれもが1913年末から1914年にかけての刊行であるらしい(奥付の写真がないから鄭方曉の記述による)。そこに問題解決の手がかりがあるのではないか。

不思議な規格外3種の集編番号と刊行年月をのちの初集リボン文様と比較対照する。

元版タンポポ文様規格外 / 初集リボン文様の順	
『金銀島』 第一集第一編	1914.4再版
	/ 初集第11編 1913.12
『回頭看』 第一集第二編	1913.12再版
	/ 初集第12編 1913.12
『迦茵小伝』 第一集第三編	?
	/ 初集第13編 1913.12

わずかに3例である。これ以外にも同様のタンポポ文様で第一四編以降の版本が刊行されたかどうかは不明だ。

上の規格外3種のうち『金銀島』は特に奇怪だというよりほかない。なぜなら、リボン文様

初集第11編が1913年12月に出版されているにもかかわらずタンポポ文様第一集第一編としてそれよりも遅い1914年4月再版になっているからだ。すでに新しい初集が出ており、あとから前の元版を表紙に使用する規格外版本が刊行されるのはおかしい。なにかの間違いだ。あるいは、小さな違いには頓着しなかったか。

どうやら「説部叢書」の編集部、あるいは担当編集者は相当に混乱している。そうとしかいいようがない。同じ作品のタンポポ文様に第二集第一編と第一集第一編というふたつの集編番号を混在させているからだ。

混在する要因のひとつは、「説部叢書」の製本方法にある。本文印刷とは別にして表紙と奥付がある。本文は基本的に同じものを使用し、表紙と奥付だけを張り付けるのだ。表紙奥付を取りかえれば、新しい書籍として再生することができる。

私は、以上の資料をもとにして次のように推測する。

元版(十集系列)全100編(実は102編)は1908年に改組し完結した。『佳人奇遇』と『経国美談』の2編を含まない全100編は、タンポポ文様のまま重版をくり返して販売だけを行っていた。木箱にまとめて売り出したことは述べた。だが、それまで通りの重版と販売がむづかしくなったと判断されたのだろう。直接の原因は、商務印書館と金港堂の合併解消だ。

日本金港堂との合併それ自体は、商務印書館にとって利益のあるものだった。創業以来の経済的危機を金港堂=原亮三郎の投資によって救われ、さらには金港堂のもつ最新式印刷技術を導入することができた。なによりも大きかったのが長尾雨山、小谷重らを商務印書館に迎えたことだ。彼ら日本人の熱心な協力を得て教科書編集に必要な知識上、技術上の秘訣を知ることができた。これを金額に換算することはできない。

商務印書館に有利な合併を解消する方向に動

かなければならなかったのは、異民族からの独立をはたした中華民国の成立があったからだ。清朝末期まで商務印書館は、教科書の編集販売の分野において巨人であった。そこから飛び出した陸費逵らが設立したのが中華書局だ。中華書局は自社の教科書を宣伝する時、商務印書館に日本の資本が入っていることをあげて激しく攻撃した。商務印書館は、異民族日本の資本と合併している。その商務印書館が編集刊行する教科書類を子どもたちに使用させていいのか、と。商務印書館からすれば日本金港堂との合併を解消しないかぎり中華書局からの攻撃を受け続けなければならない。そういう事情、背景があった。

商務印書館は合併解消をひとつの機会としてとらえ、「説部叢書」を継続維持しさらに将来の方向性を模索して試行錯誤したと思われる。商務印書館内部では「説部叢書」の名称は継承したまま、一部を更新する方向に動きはじめた。その時点で「初集」という新しい名称とリボン文様を使用する版本もすでに刊行していた。

一方で従来からある「第一集」の名称とタンポポ文様を利用しながら、編番号だけをもとの第二集第一編から第一集第一編と付け直した。つまり、「第一集」の名のもとに番号を通して振り直すことにより表面上の更新をしようとしたのではないか。商務印書館編訳所による臨時の措置だ。規格外の版本を試験的に製作したのだろう。写真のタンポポ文様を見て私はそう思う。

基本は在庫の本文に表紙と奥付をはりつけるだけだ。変更作業は比較的簡単だったと思われる。わずかな数しか作成されなかったし、おそらく実物は市場にほとんど出なかったのではないか。商務印書館内部で試作した本だと考える理由だ。その証拠に商務印書館の書籍広告に「第一集第一編」などという表示を見たことがない。鄭方曉が該書をどこで見つけたかは不明だが、少なくとも、今までの研究者で言及し

た人はいない。

当然のように不具合が生じる。従来の「第一集」を使用し表紙もタンポポ文様で同じだから、すでにある「第二集第一編」と紛らわしい。また、今までどおりにタンポポ文様の表紙だから重複延長しただけの規格外になってしまう。合併会社から独立したことを社会に訴えるためには目に見える変化が必要だ。おおむね、商務印書館編訳所内部でそのような議論があったのではないか。

結局のところ元版の第一集から第十集までの全体を「初集」に変更し表紙も新しくリボン文様で統一することにした。作品構成はほぼ従来通りだが、見た目が一新する。こうして初集100編から1914年に全体を再版してのちに次の2集100編につながる。

以上は、あくまでも私の推測だ。しかし、推測といっても「説部叢書」の奥付にある刊行年月を根拠にしている。

鄭方曉は、説明して次のようにいう。「編番号を「第一集第十数編」という版本の「説部叢書」は、「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態に違いない……[編号為“第一集第十幾編”版本的《説部叢書》應該是“十集系列”向“四集系列”過渡時“初集”的最初形態，……](51頁)

重要だからくり返す。「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態」というのが鄭方曉の考えだ。

わたしはいくつかの点で鄭方曉説に疑問を持つ。

ひとつは、販売の有無だ。「初集」の最初の形態」といえば、正式な版本として販売されたように理解される。だが、はたして市場に投入されたのだろうか。もう少し資料の提示(たとえば奥付の写真公開)と説明が必要となる。

ひとつは、現在見つかっているのが3種類だけである点だ。「初集」の最初の形態」だといいいながら3種類では少なすぎる。

ひとつは、掲げてある写真の版本は表紙がタンポボ文様であることだ。しかも「第一集第一編」とあって途中からになる。その前には依然として元版(十集系列)の第一集が存在している。どうしても、それを延長したものにしか見えない。

決定的なことがある。「初集」の最初の形態」といいながら、実物に見えるその呼称は「第一集」であって「初集」ではないことだ。もしも表紙が元版タンポボ文様でしかも「初集」という表示があれば、「初集」の最初の形態」ということができる。だが、実物は「初集」ではない。これでは「第一集」の延長上に発生した変種であって「初集」の最初の形態」ということはできない。

以上をもって鄭方曉のいう「初集」の最初の形態」ではないと考える。

私の見方をくり返せば、試作品である。漢語でいう「試行本」と同じこと。全体をひとまとめにする方向でとりあえず従来からある呼称の「第一集」を試験的に使ってみたということにすぎない。

金港堂との合弁解消の前後は、商務印書館全体がいわゆる混乱状態にあったろう。それが編訳所に影響をあたえたのではないか。タンポボ文様の第一集に第十編以上の数字をつけた試作品をつくった。販売したかどうかは不明だ。十分に考慮したようには見受けられない。だからこそ混乱しているという印象をもつ。

以下は鄭方曉論文を読んで気になった点をのべる。

樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』(樽目録第3版と略称。2002)に言及がある。ウェブで公開している最新版は利用できなかったらしい。劉永文『晚清小説目録』(2008)と比較して劉目録の方が樽目録第3版よりもすべての面ですぐれているようだ(劉永文所編の《晚清小説目録》, 無論は資料搜集の扎实準確性還是体例編排的清晰規範性, 都要略優於樽本

照雄先生所做的目録)12頁。

### 附録 《説部叢書》系列目録

此表根据(日)樽本照雄著《新編清末民初小説目録》相关条目整理

説部叢書	作品名称	作者、译者	出版日期
1 1	天際落花(言情小説)	(日)黒岩周六(泪香)原著 海宁褚灵辰译	戊申5(1908)/1914.4再版
1 2	剧场奇案(偵探小説)	(英)福尔奇斯休姆著 商务印书馆编译所译	戊申6(1908)/1913.2
1 3	梦游二十一世纪(纪西历纪元二千零七)	(荷兰)达爱斯克洛提斯著 杨德森译 杨加统校阅	癸卯4(1903.4)/1914.4再版

鄭方曉の個人的感想だ。それについて私が言うことは特にない。ただし、鄭方曉が作成した附録「《説部叢書》系列目録」に問題が発生する。典拠資料について注釈があるが、おかしなものだ。次のように説明する。「此表根据(日)樽本照雄著《新編清末民初小説目録》相关条目整理」。依拠したのは樽目録第3版だということ。これはなにか。

劉永文目録のほうが樽目録第3版よりもすぐれている、と鄭方曉は断定した。「《説部叢書》系列目録」を作成する際に、その優れた劉永文目録を鄭はなぜ使用しなかったのだろうか。矛盾している。劉永文『民国小説目録』(2011)も利用できたはずだ。鄭が劉永文目録よりも劣る樽目録第3版に依拠したことは、どう考えても不思議かつ不可解に思える。「説部叢書」目録を作成するについては、なによりも内容のより優秀な劉永文目録を使用しなければ意味がないではないか。

「《説部叢書》系列目録」は、初集本(2集、第3集、第4集を含む)を主として対象にしている。元版はかろうじて刊年欄に記載がある。欄外に『経国美談』『佳人奇遇』が刊行されたと注をつけるだけ。集編番号についても元版(十集系列)は初集本(四集系列)とは別ものだ。両者を分けて区別がつくような工夫が必要ではなかったか。

中国では阿英目録あたりからはじめて翻訳小説の原作について記述しないのが一般的だ。当時は原作を明らかにする力がなかったのだろう。以後の目録は記述しないことを遵守してい

るかのように見える。鄭方曉の一覧表も同様だ。樽目録第3版を参照していながらそこで記述している原作、原著者についてのすべてを無視した。鄭方曉はなぜ独自に注記しなかったのか。それができないのであれば樽目録第3版を写してもよかった。翻訳叢書の専門研究だから原作についての説明があるべきだ。そこを無視したことは研究の後退になる。博士論文としてはもの足りない。

鄭振鐸から引用してあいかわらず間違った林紵批判をくり返している(78頁)。

シェイクスピアの戯曲を小説に書き換えたと批判する。2007年にはすでに真相が明らかにされている。鄭振鐸による林紵冤罪事件であることを知らないらしい。

『梅孽』についても「將伊ト森(今訳易ト生)所作的戯劇《群鬼》改編成了一部文言小説」(78頁)と書いて鄭振鐸と同じく林紵に濡れ衣を着せている。これも2008年にはもともと小説化された英語作品を底本に使用したことが明らかにされている。指導教授からの指導はなかったようだ。

「林紵と商務印書館が協力した最初の翻訳作品は『英国詩人吟辺燕語』に違いない[林紵と商務合作的第一本翻訳作品應該是《英国詩人吟辺燕語》]」(139頁)と書く。誤り。それよりも早く1903年に林訳『伊索寓言』が商務印書館から刊行されている。

「参考文献」の原始文本(180-182頁)に掲げられた諸本には角書を採用していない。理由は不明。

#### 付建舟の研究

付建舟2009は、中村1981を読んでいないと思う。だが「説部叢書」が2系統に分かれることを独自に把握した。広告を丹念に調査しながら彼の用語で「十集系列(元版のこと)」と「四集系列(初集本のこと)」に区別した。数多くの清末民初版本を実物で検討している付建舟だ

からこそ可能なことだった。中国人研究者では最初の提起である。鄭方曉もその用語を使用している。

付建舟は、実物を収集し「清末民初版本経眼録」シリーズを発表している。現在、5種類を見ることができる。現存する書物にもとづいた堅実な研究を進めているのがわかる。高い評価を得て当然だ。

このたびの新しい付建舟2015の主眼は以下のとおり。

「説部叢書」は「十集系列(元版)」と「四集系列(初集本)」に分かれる。「十集系列」の100種は、「四集系列」の初集である。ここまでは以前の主張のくり返し。次が新しい。「十集系列」は1903年に出版を開始して「1907年7月」に全部を刊行し終わる。年月にカッコをつけた理由は後述する。

「十集系列」の刊行完結を「1907年7月」に特定したところに注目する。私が述べてきた1908年元版(十集系列)完結とは異なる。

付建舟2015の研究方法は、実物の奥付にある初版刊行年月の記載を重視することだ。

例えば『夢遊二十一世紀』の奥付写真を掲げて次のように説明する。

中華民國二年(1913)十二月六版本には「癸卯年四月初版」とある。初版は1903年<sup>ママ</sup>5月である、という。ママとつけたのは、日にちのない旧曆を新曆に機械的に変換することはできないからだ。癸卯年四月は新曆になおせば4月27日から5月26日になる。「5月」だけでは不十分だ。正確に書こうとすれば「癸卯(1903)年四月」とするよりしかたがない。

私は、付建舟が後の版本の奥付を立論の主な根拠にするとところに不安をおぼえる。実物を数多く確認している付建舟にいうのはためらわれるが、その認識の方法は危険だ。なぜなら六版本にある初版についての記載が間違っている可能性もあるからだ。「説部叢書」は重版をくりかえしているからいくつもの刊年記載がある。



一部を除いて全部が一致することは多くはない。実物を多数手にしている付建舟はそのことをよく知っているはずだ。最終的には、初版本そのもので確認することが必要だ。

例を示す。同じ商務印書館が刊行した林訳『伊索寓言』の第十八版の奥付には「丙午年十一月初版 / 中華民國十一年三月十八版」とある。付建舟にならえば、初版は丙午(1906)年だと思えない。事實は違う。初版は光緒二十九年(1903)年だ。該書の第八版あたりからどういうわけか初版の表示が間違っている。

私が見るところ、再版によって初版を判断するのは不適切だ。重ねていう。「癸卯年四月初版」とある初版の実物を確認することが重要だ。

付建舟が別の例としてあげる『劇場奇案』は、元版(十集系列)と初集本(四集系列)の初版年月がさいわい一致していた。『経国美談』から作品の入れ替えを指摘したのはいい。だが、1908年に行なわれた「説部叢書」の改組を証明する版本であることに言及しないのは残念だった。

さて、元版(十集系列)が刊行完了した年月が問題だ。付建舟は「1907年7月」と明記している。その根拠はなにか。

彼は、『掃迷帚』(光緒三十三年七月初版, 宣統元年歲次己酉九月再版)の広告を証拠として提出する(31頁)。

「説部叢書百種」という広告に刊行が完結したと宣言している。該書の奥付にある「宣統元年歲次己酉九月再版」は無視して「光緒三十三年七月初版」の方を根拠にしたらしい。それを「1907年7月」と書き換えた。そうなる中国では見なれた新曆旧曆混用である。

付建舟は勘違いをしている。「説部叢書百種」という広告が初版「光緒三十三年七月初版」すなわち彼のいう「1907年7月」版にも掲載されていると考えたのだ。それはおかしい。宣統元(1909)年歲次己酉九月再版には「説部叢書百種」という広告は確かに掲載されているのだら

う。だが、初版にもあるという保証はどこにもない。このばあい、『掃迷帚』初版に「説部叢書百種」という広告があることを確認する必要があった。それにあるのならば、付建舟のいう「1907年7月」完結の傍証とすることができる。だが、たぶんそれはない。

付建舟は資料確定の優先順位を間違えている。元版(十集系列)の刊行完結を把握するためには、実物の奥付を確認することがなによりも優先されなければならない。書籍広告は、傍証にはなるだろう。だが、傍証を直接の根拠にするためには慎重な扱いを必要とする。

私が写真で奥付があること確認した元版(十集系列)第十集は以下の4種類だ。典拠を文末に記す。

『新飛艇』第十集第一編 光緒三十三年十二月初版 [付二196]

『鉄血痕』第十集第四編 光緒三十四年二月初版 [付三188]

『双喬記』第十集第八編 光緒三十四年三月初版 孔夫子旧書網に写真あり(図15)

『双鷺侶』第十集第九編 光緒三十四年六月初版 孔夫子旧書網に写真あり(図16)  
記号は以下のとおり。

[付二] 付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

[付三] 付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8



図15



図16

以上の4種をみれば第九編の「光緒三十四年六月」がその中ではいちばん遅い出版で1908年だ。実物がそうになっている(ネット古書店で見た『海衛偵探案』第十集第十編には奥付がなかった)。

以上を見れば元版(十集系列)第十集の刊行終了は1908年だと考えるのが妥当だ。私は従来から指摘している。付建舟のいう「1907年7月」完結は正しくない。

付建舟は、自分で実物の2種類を確認しているはずなのになぜそれを利用しなかったのか。第四編は光緒三十四(1908)年二月初版([付三188])であって広告の「1907年7月」よりも明らかに遅い。確かな証拠を手元においているはずなのに忘れたのだろうか。不思議に思う。

あとは、鄭方曉2013との比較になる。

日本にいる私が鄭方曉の博士論文を読んでみる。付建舟論文の欄外注によると目下のところの研究主題は「説部叢書」研究だ。当然、付建舟は鄭の博士論文を読んでいると考えて以下を述べる。

付建舟は、鄭方曉が提起した『金銀島』編番号の不具合を説明しない。もとは付建舟自身が出[付朱30]に収録した版本ではないか。言及があってもよかったように思う。

鄭方曉は「説部叢書」全数324編とした。付建舟は「合集322種」(32頁)と書いて鄭説について話題にしない。

鄭方曉のいう「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態、私のいう試作品(試行本)に関する付建舟の意見を読みたかった。

#### 【参考文献】

中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」『野草』第27号 1981.4.20  
謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」『涵芬楼往事』『隨筆』第6集 1980.2  
陸 昕「説《説部叢書》」『蔵書家』第3輯 2001.6

黄 惲「也説《説部叢書》」『蠹痕散輯』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.2

陸 昕「從《説部叢書》談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵鑑賞書系

付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年第3期(総第93期) 2009発行月日記

鄒瑞珩「“説部叢書”的胸懷」袁進主編『中国近代文学編年史：以文学廣告為中心(1872-1914)』北京大学出版社2013.5。注：2種類あることを指摘する。ただし、名称を提案しない。ひとつは、1903年から刊行しはじめたもの(本稿でいう元版(十集系列))。もうひとつは、1914年に商務印書館が日本資本(金港堂)を退けてから重版した初集。これは最初の「説部叢書」の再版だという。「説部叢書」組織化の変遷についてはそれ以上の説明はない。

鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦大学 2013 博士論文

付建舟「商務印書館“説部叢書”初集考述」『漢語言文学研究』2015年第4期 2015.12.15

樽本照雄『商務印書館研究論集(増補版)』清末小説研究会2016.5.15 電字版

#### 樽本照雄著 公開予定

『清末小説二談』  
『漢訳アラビアン・ナイト論集(増補版)』  
『清末翻訳小説論集(増補版)』  
『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』

#### 公開中

『清末民初小説目録X2』  
『商務印書館研究論集(増補版)』  
『初期商務印書館研究(増補版)』

次号の公開は2017年4月1日を予定しています  
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

林訳『伊索寓言』の底本(下)  
挿絵の謎を解く

沢本郁馬

ほかの教科書への影響

上海商務印書館は、1902年ころをめざして日本金港堂との合併計画を推進していた。それが商務印書館の火災、金港堂の教科書事件によって延期になった。正式に合併会社となったのは、1903年である。小谷重、兩山長尾楨太郎らが上海に赴き、商務印書館の教科書編集に参加した。その成果が1904年の『最新国文教科書』である。爆発的に売れて商務印書館の営業成績は大いに伸びた。『最新国文教科書』については、日本人が参加していたことを除いてはよく知られたことだ。商務印書館は、最初は日本人が編集したことを宣伝に使った。その後、中国社会の趨勢が民族自立に変化すると、それにあわせて日本人を表面に出さなくなったのである。

さて、『最新国文教科書』第6冊(光緒三十年十二月初版/光緒三十四年六月十五版/宣統二年七月廿九版)\*23にふたつのイソップ寓話が掲載されている。

「山鼠報徳(原文は、ライオンと鼠)」の本文は、基本的に林訳と同文だが部分的に異なる。挿絵(図77)は、もとのタウンゼンド本を使用している。このばあい『伊索寓言』の挿絵(図3)とは違う。タウンゼンド本の挿絵のほうはよく見かける。



(図77)は二十九版 孔夫子旧書網より



「遇熊(ふたりの男と熊)」も林訳と同じだが、部分的に書き直してある。挿絵は『伊索寓言』のもの(図21)にもとづいて別の画家が模写したらしい(図78)。



(図78)第6冊十五版 孔夫子旧書網より



(図21)

『伊索寓言』(図21)に見えるライフル銃らしきものは模写した時に省略した。イソップ寓話には時代が合わないという判断があったのかも知れない。また、絵柄の人物は中国風に描き直したように見える。画像が不鮮明だから違う可能性もある。

『最新国文教科書』は『伊索寓言』刊行後に編集されたものだ。だから林訳の本文を収録しているのは理解できる。ただ、挿絵については疑問が出てくる。

「ライオンと鼠」の挿絵は林訳からではなく、底本のタウンゼンド本から引用した。なぜ『伊索寓言』のものを使用しなかったのか。「ふたりの男と熊」にしてもわざわざ描き直さなくても『伊索寓言』掲載の挿絵をそのまま利用することもできたはずだ。

もうひとつ『最新国文教科書』第2冊の挿絵(図79)を見る。



(図79) 第2冊  
孔夫子旧书网より



(図70)



(図71)

この挿絵はもとは『華英進階』初集23頁(図70)にあった。児童が壺に入った果実を手一杯ににぎって取り出そうとした。口のところで引っかかってしまい抜けない。母親が半分にしなさいという手が抜けた。食欲になるな。

その挿絵は中国の婦人と子供だし、机椅子も中国風だ。

それを林訳第13丁才(図71)に利用した。さらに、『最新国文教科書』第2冊が流用した。ただし、母親と児童だけでは1頁を埋めることができない。人物をそのまま中央に使い、まわりの壁と絵画、引き戸、鴨居などを追加した。

同じ商務印書館の編集部(編訳所)内部において、挿絵をかなり自由に共同使用していたらしい。 □

【注】

23) 光緒三十一年歲次乙巳七月初版 / 光緒三十二年歲次丙午三月六版もある。小谷重、長尾楨太郎の名前はない。

【参考】

根岸宗一郎「近代中国におけるギリシア文学 周作人と羅念生を中心に(付:古代ギリシア文学翻訳年表)」『慶應義塾大学日吉紀要:言語・文化・コミュニケーション』第36号2006.3 電字版

川戸道昭、榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧 第8巻【千一夜物語・イソップ編】明治 大正 昭和 平成の135年翻訳目録』大空社、ナダ出版センター 2009.3.27

杉村安幾子「錢鍾書「イソップ寓話を読む」から見える風景:イソップを子供に読ませるな」金沢大学『言語文化論叢』第16号2012.3.31 電字版

次頁

『伊索寓言』初版とタウンゼンド300絵50本の比較一覧表 『伊索寓言』には表題がないため文章冒頭4文字を記載 / Tは、田中達三郎訳『伊蘇普物語』影印本

次の順：林訳番号、丁数、挿絵の有 無×、冒頭4文字、タウンゼント本頁数、原題、田中訳番号/注

- |    |      |  |    |                                     |       |           |
|----|------|--|----|-------------------------------------|-------|-----------|
| 1  | 01a  | 有獅臥於   | 31 | THE LION AND THE MOUSE.             | T 第1  | 獅子と鼠の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 2  | 01b× | 就乳之羔   | 32 | THE WOLF AND THE LAMB.              | T 第2  | 狼と羊児の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 3  | 01b× | 驢行野聞   | 32 | THE ASS AND THE GRASSHOPPER.        | T 第3  | 驢馬と蹇螽の話   |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 4  | 02a× | 狼搏獸而   | 33 | THE WOLF AND THE CRANE.             | T 第4  | 狼と鶴の話     |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 5  | 02a× | 有一父而   | 34 | THE FATER AND HIS SONS.             | T 第5  | 父と児輩の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 6  | 02b× | 蝙蝠夜飛   | 34 | THE BAT AND THE WEASELS.            | T 第6  | 蝙蝠と鼬の話    |
| 7  | 02b  | 雄鷄率雌   | 35 | THE COCK AND THE JEWEL.             | T 第7  | 鶏と宝玉の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 8  | 03a× | 燕与烏遇   | 35 | THE SWALLOW AND THE CROW.           | T 第8  | 燕と鴉の話     |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 9  | 03b× | 群獸野集   | 36 | THE KINGDOM OF THE LION.            | T 第9  | 獅子王の国の話   |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 10 | 03b× | 畜狗之家   | 36 | THE TRAVELLER AND HIS DOG.          | T 第10 | 旅人と犬の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 11 | 04a  | 冬蟻出曝   | 36 | THE ANTS AND THE GRASSHOPPER.       | T 第11 | 蟻ときりぎりすの話 |
|    |      | 注：畏廬曰。挿絵は『華英進階』4集194頁、『文学初階』巻3第21丁ウから        |    |                                     |       |           |
| 12 | 04a× | 燒炭之翁   | 38 | THE CHARCOAL-BURNER AND THE FULLER. | T 第13 | 燒炭者と晒布者の話 |
|    |      | 注：畏廬曰。林訳は順番変更                                |    |                                     |       |           |
| 13 | 04a× | 童子捕蝗   | 38 | THE BOY HUNTING LOCUSTS.            | T 第14 | 蝗蚱を捉る童児の話 |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 14 | 04b  | 兔晒龜曰   | 37 | THE HARE AND THE TORTOISE.          | T 第12 | 兔と龜の話     |
|    |      | 注：畏廬曰。林訳は順番変更。三版、五版、八版、十八版挿絵『華英進階』3集90頁に入れ替え |    |                                     |       |           |
| 15 | 05a× | 漁者漁於   | 38 | THE FISHERMAN PIPING.               | T 第15 | 笛を吹く漁師の話  |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 16 | 05a  | 犬得肉經   | 39 | THE DOG AND THE SHADOW.             | T 第16 | 犬と影の話     |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 17 | 05b× | 犢車過狹   | 39 | HERCULES AND THE WAGGONER.          | T 第17 | 不動尊と車夫の話  |
| 18 | 05b× | 鼯生而盲   | 40 | THE MOLE AND HIS MOTHER.            | T 第18 | 盲者と母の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 19 | 05b× | 有牧於叢   | 40 | THE HERDSMAN AND THE LOST BULL.     | T 第19 | 牧者と失牛の話   |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 20 | 06a× | 鹿謂其母   | 41 | THE FAWN AND HIS MOTHER.            | T 第20 | 鹿児と鹿母の話   |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 21 | 06a× | 驢与狐友   | 41 | THE ASS, THE FOX, AND THE LION.     | T 第21 | 驢馬と狐と獅子の話 |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 22 | 06b× | 人置蜜隠   | 42 | THE FLIES AND THE HONEY POT.        | T 第22 | 蠅と蜜壺の話    |
|    |      | 注：畏廬曰。八版、奥付なしの原本、十八版挿絵追加                     |    |                                     |       |           |
| 23 | 06b× | 野獸鱗集   | 42 | THE LIONESSE.                       | T 第23 | 牝獅子の話     |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |
| 24 | 07a× | 蛇方冬而   | 43 | THE FARMER AND THE SNAKE.           | T 第24 | 農夫と蛇の話    |
|    |      | 注：畏廬曰  |    |                                     |       |           |

- 25 07b x 有人挟獅 43 THE MAN AND THE LION. T 第25 人と獅子の話  
注: 畏廬曰
- 26 07b x 柿樹与蘋 43 THE POMEGRANATE, APPLE TREE, AND BRAMBLE. T 第26 石榴と林檎と覆盆子の話  
注: 畏廬曰
- 27 07b x 田父種稻 44 THE FARMER AND THE STORK. T 第27 農夫と鶴の話  
注: 畏廬曰
- 28 08a x 有群呼於 44 THE MOUNTAIN IN LABOUR. T 第28 山の震動する話  
注: 畏廬曰
- 29 08a x 人熊自表 44 THE BEAR AND THE FOX. T 第29 熊と狐の話  
注: 畏廬曰
- 30 08b x 龜曝日中 45 THE TORTOISE AND THE EAGLE. T 第30 亀と鷲の話  
注: 畏廬曰
- 31 08b 有狐陷於 45 THE FOX AND THE GOAT. T 第31 狐と野羊の話  
注: 畏廬曰
- 32 09a 最黒之鳥 46 THE RABEN AND THE SWAN. T 第32 鴉と鶴の話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を後ろ9bへ変更
- 33 09b x 鶉中揺求 46 THE THIRSTY PIGEON. T 第33 鳩の渴いた話  
注: 畏廬曰。挿絵は『華英進階』2集14頁から  
————— 50 THE CAT AND THE COCK. T 第40 猫と雄鶏の話  
注: 未掲載
- 34 09b x 狼欲求食 50 THE WOLF IN SHEEP'S CLOTHING. T 第41 羊の皮を蒙つた狼の話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を前9aに変更。林訳は順番変更
- 35 10a 笨車載重 47 THE OXEN AND THE AXLE-TREES. T 第35 牛と車軸の話  
注: 絵は馬車に変更。話は牛車。林訳は順番変更
- 36 10a x 一獅處深 51 THE LION IN LOVE. T 第44 獅子の恋慕話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を前9bへ変更。林訳は順番変更
- 37 10a 鶴大集於 48 THE FARMER AND THE CRANES. T 第36 農夫と鶴の話  
注: 絵は鳩?
- 38 10b x 獅老莫能 48 THE SICK LION. T 第37 獅子の病氣の話  
注: 林訳重版は順番を前10aへ変更。
- 39 11a 二人同行 49 THE BEAR AND THE TWO TRAVELLERS. T 第38 熊と旅人の話  
注: 林訳重版は順番を後ろ11aへ変更。挿絵は『華英進階』3集129頁、『文学初階』巻5第25丁才から
- 40 11a x 狐見取入 49 THE FOX WHO HAD LOST HIS TAIL. T 第39 尾を損じた狐の話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を前10bへ変更。
- 41 11b 狗席藁臥 47 THE DOG IN THE MANGER. T 第34 秣槽にある犬  
注: 畏廬曰。挿絵は『華英進階』初集48頁、『文学初階』巻1第23丁才から。林訳は順番変更
- 42 11b 牧人得亡 50 THE GOAT AND THE GOATHERD. T 第42 野羊と牧奴の話  
注: 林訳は1行ずれて後ろの12aへ。挿絵は『華英進階』4集109頁から
- 43 12a x 有人足跡 51 THE BOASTING TRAVELLER. T 第43 旅行をした者の自慢話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を前11aへ変更。
- 44 12a x 人有盡貨 51 THE MISER. T 第45 吝嗇翁の話  
注: 畏廬曰
- 45 12b x 豚与山羊 52 THE PORKER, THE SHEEP, AND THE GOAT. T 第46 豚と羊と野羊の話  
注: 畏廬曰
- 46 13a x 一瓶実栗 52 THE BOY AND THE FILBERTS. T 第47 童児と榛実の話  
注: 畏廬曰。五版、八版、十八版挿絵は『華英進階』初集23頁から追加
- 47 13a x 群蛙之国 53 THE FROGS ASKING FOR A KING. T 第48 蛙の頭取を求る話  
注: 畏廬曰。林訳重版は順番を前12bへ変更。

- 48 13b × 蛇穴於週 54 THE LABOURER AND THE SNAKE. T 第49 人夫と蝮蛇の話  
注：畏廬曰
- 49 13b × 獅病揺臥 54 THE LION, THE MOUSE, AND THE FOX. T 第50 獅子と鼠と狐の話  
注：畏廬曰
- 50 14a × 櫪人長日 55 THE HORSE AND GROOM. T 第51 馬と厩廐の話  
注：畏廬曰
- 51 14a × 騾夫挾一 55 THE ASS AND THE MULE. T 第52 驢馬と騾馬の話  
注：畏廬曰。八版、奥付なしの原本、十八版挿絵は『華英進階』2集22頁から追加
- 52 14b × 有人畜一 56 THE ASS AND THE LAP-DOG. T 第53 驢馬と狒狗の話  
注：畏廬曰
- 53 14b × 群啍合謀 57 THE OXEN AND THE BUTCHERS. T 第54 牛と屠牛者の話  
注：畏廬曰
- 54 15a 牧童牧羊 57 THE SHEPHERD'S BOY AND WOLF T 第55 牧童と狼の話  
注：畏廬曰。挿絵は『文学初階』巻5第24丁ウ、巻6第38丁オから  
————— 58 THE BOYS AND THE FROGS. T 第56 児輩と蛙の話  
注：未掲載
- 55 15b × 売塩者将 58 THE SALT MERCHANT AND HIS ASS. T 第57 塩商と驢馬の話  
注：畏廬曰
- 56 15b × 有狗潜躡 59 THE MISCHIEVOUS DOG. T 第58 悪犬の話
- 57 16a × 牧者暮収 59 THE GOATHERD AND THE WILD GOATS. T 第59 牧者と野羊の話  
注：畏廬曰
- 58 16b × 有中年之 60 THE MAN AND HIS TWO SWEETHEARTS. T 第60 男と二人の恋女の話  
注：畏廬曰
- 59 16b × 病鹿臥於 61 THE SICK STAG. T 第61 牡鹿の病気話
- 60 16b × 童子之手 61 THE BOY AND THE NETTLES. T 第62 童児と蓴麻の話  
注：畏廬曰
- 61 17a × 星卜之家 62 THE ASTRONOMER. T 第63 天文学者の話  
注：畏廬曰
- 62 17a 狼語羊白 62 THE WOLVES AND THE SHEEP. T 第64 狼と羊の話  
注：畏廬曰
- 63 17a × 猫見病鳥 62 THE CAT AND THE BIRDS. T 第65 猫と鳥の話  
注：畏廬曰
- 64 17b 有伝聞木 63 THE VAIN JACKDAW. T 第66 虚飾鴉の話  
注：畏廬曰。挿絵は次と同じ。THE FAVOURITE BOOK OF FABLES /ÆSOP, OR ÆSOPUS LONDON:  
THOMAS NELSON AND SONS, 1890。25頁
- 65 18a × 羔乘屋四 64 THE KID AND THE WOLF. T 第67 野羊仔と狼の話  
注：畏廬曰
- 66 18a × 盲婦欲矐 64 THE OLD WOMAN AND THE PHYSICIAN. T 第68 老婦と医者の話  
注：畏廬曰。林訳重版は「盲嫗」に変更
- 67 18b × 牛飲於池 65 THE OX AND THE FROG. T 第69 牛と蛙の話  
注：畏廬曰
- 68 18b × 老圃垂死 66 THE FARMER AND HIS SONS. T 第70 農夫と児輩の話  
注：畏廬曰
- 69 19a × 黄犢憫青 66 THE HEIFER AND THE OX. T 第71 牲犢と耕牛の話  
注：畏廬曰
- 70 19a 二雄鷄相 66 THE FIGHTING COCKS AND THE EAGLE. T 第72 闘鷄と鷲の話  
注：畏廬曰。原作無絵、挿絵は『華英進階』初集29頁から
- 71 19b × 戰馬百戰 67 THE CHARGER AND THE MILLER. T 第73 戰馬と磨者の話

- 注：畏廬曰
- 72 19b × 騎士厚秣 67 THE HORSE AND HIS RIDER. T 第75 馬と騎者の話  
注：畏廬曰
- 73 19b × 四肢讖叛 68 THE BELLY AND THE MEMBERS. T 第76 胃と肢の話
- 74 20a × 嫠婦日潔 68 THE WIDOW AND HER LITTLE MAIDENS. T 第77 寡婦と幼婢の話  
注：畏廬曰
- 75 20a × 葡萄既熟 69 THE VINE AND THE GOAT. T 第78 葡萄蔓と野羊の話  
注：畏廬曰
- 76 20b 猿跳舞於 67 THE FOX AND THE MONKEY. T 第74 狐と猿の話  
注：畏廬曰
- 77 20b × 太歳之星 69 JUPITER AND THE MONKEY. T 第79 大神宮と猿の話  
注：畏廬曰
- 78 21a × 鴿遇隼而 70 THE HAWK, THE KITE, AND THE PIGEONS. T 第80 鷹と紙鳶と鳩の話  
注：畏廬曰
- 79 21a × 猪龍与鯨 70 THE DOLPHINS, THE WHALES, AND THE SPRAT. T 第81 海豚と鯨と鱈の話
- 80 21a × 燕方春依 70 THE SWALLOW, THE SERPENT, AND THE COURT OF JUSTICE. T 第82 燕と蛇と裁訟局の話  
注：畏廬曰
- 81 21b × 河流下駛 71 THE TWO POTS. T 第83 一双の壺の話  
注：畏廬曰
- 82 21b × 牧人捕得 71 THE SHEPHERD AND THE WOLF. T 第84 牧者と狼の話  
注：畏廬曰
- 83 22a × 蟹語其子 71 THE CRAB AND ITS MOTHER. T 第85 蟹兒と蟹母の話
- 84 22a × 二女同産 72 THE FATHER AND HIS TWO DAUGHTERS. T 第86 爺と二人の娘の話  
注：畏廬曰
- 85 22a × 童子竊同 72 THE THIEF AND HIS MOTHER. T 第87 盗人と母の話  
注：畏廬曰
- 86 22b × 有老人受 73 THE OLD MAN AND DEATH. T 第88 老人と死神の話  
注：畏廬曰
- 87 22b × 老松一日 73 THE FIR TREE AND THE BRAMBLE. T 第89 松と覆盆子の話  
注：畏廬曰
- 88 23a × 有人購得 73 THE ÆTHIOP. T 第90 黒奴の話
- 89 23a 鼠窟地而 74 THE MOUSE, THE FROG, AND THE HAWK. T 第91 鼠と蛙と鷹の話  
注：畏廬曰。挿絵は『華英進階』4集17頁から  
————— 75 THE FISHERMAN AND HIS NETS. T 第92 漁人と網の話  
注：未掲載
- 90 23b × 狼見寤於 75 THE WOLF AND THE SHEEP. T 第93 狼と羊の話
- 91 23b × 嫗嗜酒覓 75 THE OLD WOMAN AND THE WINE-JAR. T 第94 老婦と酒壇の話  
注：畏廬曰
- 92 23b × 一人傷於 76 THE MAN BITTEN BY A DOG. T 第95 犬に咬れた人の話
- 93 24a 獵者罷獵 76 THE HUNTSMAN AND THE FISHERMAN. T 第96 獵師と漁師の話  
注：畏廬曰。挿絵は『文学初階』巻3第6丁ウから
- 94 24b × 鴉啣肉止 76 THE FOX AND THE CROW. T 第97 狐と鴉の話  
注：畏廬曰
- 95 24b × 孀婦畜羊 77 THE WIDOW AND THE SHEEP. T 第98 寡婦と羊の話
- 96 24b × 驢登屋而 77 THE PLAYFUL ASS. T 第99 驢馬の悪戯の話
- 97 24b × 鹿困於狗 78 THE STAG IN THE OX-STALL. T 第100 牛部屋に逃れた鹿の話



- 注：畏廬曰
- 98 25a × 一人飼二 79 THE TWO DOGS. T 第101 二頭の犬の話
- 99 25b 野驢与獅 79 THE WILD ASS AND THE LION. T 第102 驢馬と獅子の話  
注：畏廬曰。挿絵は『華英進階』2集97頁、3集118頁から。十一版、十八版は模写
- 100 25b × 獅遊於海 80 THE LION AND THE DOLPHIN. T 第103 獅子と海豚の話
- 101 26a × 鷹蹲於高 81 THE EAGLE AND THE ARROW. T 第104 鷹と箭の話
- 102 26a × 鳶病且死 81 THE SICK KITE. T 第105 鳶の病気話
- 103 26a × 天方署獅 82 THE LION AND THE BOAR. T 第106 獅子と野猪の話  
注：畏廬曰
- 104 26b × 群鼠聚穴 82 THE MICE IN COUNCIL. T 第107 衆鼠の会議話  
注：畏廬曰
- 105 26b × 鹿眇其一 83 THE ONE-EYED DOE. T 第108 片眼の牝鹿の話  
注：畏廬曰
- 106 27a × 黄鼠狼日 83 THE MICE AND THE WEASELS. T 第109 鼠と鼬の話
- 107 27a × 牧者瀕海 84 THE SHEPHERD AND THE SEA. T 第110 羊飼と海の話  
注：畏廬曰
- 108 27a × 驢与鷄同 85 THE ASS, THE COCK, AND THE LION. T 第111 驢馬と雄鷄と獅子の話
- 109 27b × 河冰既合 85 THE RIVERS AND THE SEA. T 第112 河と海の話
- 110 27b × 野虬休於 85 THE WILD BOAR AND THE FOX. T 第113 野猪と狐の話
- 111 27b × 村姑戴牛 86 THE MILKWOMAN AND HER PAIL. T 第114 綾乳女と提桶の話  
注：畏廬曰
- 112 28a × 蜂觀於帝 86 THE BEE AND JUPITER. T 第115 蜜蜂と大神宮の話
- 113 28a × 狼過狗於 87 THE WOLF AND THE HOUSE-DOG. T 第116 狼と飼犬の話
- 114 28a × 驢過市而 88 THE ASS CARRYING THE IMAGE. T 第118 偶像を負た驢馬の話  
注：林訳は順番変更
- 115 28b × 有巖城見 87 THE THREE TRADESMEN. T 第117 三人の商人の話  
注：林訳は順番変更
- 116 28b 人野居為 88 THE MASTER AND HIS DOGS. T 第119 主人と犬の話  
注：林訳は無関係な絵
- 117 28b × 獵狗壯時 89 THE OLD HOUND. T 第120 老犬の話  
注：畏廬曰
- 118 29a × 二人同行 90 THE TWO TRAVELLERS AND THE AXE. T 第121 二人の旅行者と斧の話
- 119 29a × 病獅且死 90 THE OLD LION. T 第122 老たる獅子の話  
注：畏廬曰
- 120 29b × 狼過牧人 90 THE WOLF AND THE SHEPHERDS. T 第123 狼と羊飼の話
- 121 29b × 行旅者群 91 THE SEASIDE TRAVELLERS. T 第124 海岸と旅人の話  
注：畏廬曰
- 122 29b × 行人賃驢 91 THE ASS AND HIS SHADOW. T 第125 驢馬と陰の話
- 123 30a × 驢受蒙於 92 THE ASS AND HIS MASTERS. T 第126 驢馬と主人の話  
注：畏廬曰
- 124 30a × 水星之精 92 MERCURY AND THE SCULPTOR. T 第127 福大黒と彫刻者の話  
注：畏廬曰
- 125 30b × 狐為狗逼 93 THE FOX AND THE WOOD-CUTTER. T 第128 狐と樵夫の話  
注：畏廬曰
- 126 30b × 大橡見拔 94 THE OAK AND THE REEDS. T 第129 橡砧と芦の話  
注：畏廬曰
- 127 31a × 獅入村舍 94 THE LION IN A FARMYARD. T 第130 畜欄に躍込む獅子の話  
注：畏廬曰

- 128 31a × 狼取人羔 95 THE WOLF AND THE LION. T 第131 狼と獅子の話  
 注：畏廬曰
- 129 31b × 捕禽者将 95 THE BIRDCATCHER, THE PARTRIDGE, AND THE COCK. T 第132 捕鳥奴と鷓鴣と雄鶏の話
- 130 31b × 蟻沿江涓 96 THE ANT AND THE DOVE. T 第133 蟻と鳩の話
- 131 32a 野兔積餒 97 THE HARES AND THE FROGS. T 第134 兔と蛙の話  
 注：畏廬曰。林訳は別の絵
- 132 32a × 猴登樹嶺 98 THE MONKEY AND THE FISHERMEN. T 第135 猿と漁師の話
- 133 32a × 富翁購鷺 98 THE SWAN AND THE GOOSE. T 第136 鵠と雁の話  
 注：畏廬曰
- 134 32b × 鹿受逼於 98 THE DOE AND THE LION. T 第137 牝鹿と獅子の話
- 135 32b × 漁者長日 99 THE FISHERMAN AND THE LITTLE FISH. T 第138 漁人と小魚の話
- 136 32b × 獵者怯其 99 THE HUNTER AND THE WOODMAN. T 第139 獵師と樵夫の話
- 137 33a × 狐餒見椽 100 THE SWOLLEN FOX. T 第140 飢た狐の話
- 138 33a × 二蟆同居 100 THE TWO FROGS. T 第141 二疋の蛙の話  
 注：畏廬曰
- 139 33a × 一灯満其 100 THE LAMP. T 第142 ランプの話  
 注：畏廬曰
- 140 33a 阿刺伯人 101 THE CAMEL AND THE ARAB. T 第143 駱駝と亜刺比亞人の話  
 注：畏廬曰。林訳は別の絵
- 141 33b 有業磨者 101 THE MILLER, HIS SON, AND THEIR ASS. T 第144 磨者と息子と驢馬の話  
 注：畏廬曰。林訳は別の絵
- 142 34b × 群鼠穴於 103 THE CAT AND THE MICE. T 第145 猫と鼠の話  
 注：畏廬曰
- 143 35a × 牛見嚙於 104 THE MOUSE AND THE BULL. T 第146 土鼠と野牛の話  
 注：畏廬曰
- 144 35a × 富人大置 104 THE DOG AND THE COOK. T 第147 犬と料理番の話  
 注：畏廬曰
- 145 35b 有勲貴之 105 THE DANCING MONKEYS. T 第149 猿演戯の話  
 注：畏廬曰。林訳は順番変更、無関係な絵。市販の日本埋め草凸版
- 146 36a × 群盜夜劫 105 THE THIEVES AND THE COCK. T 第148 盜賊と雄鶏の話  
 注：畏廬曰。林訳は順番変更
- 148 36a × 行人疲於 106 THE TRAVELLER AND FORTUNE. T 第151 旅人と水神の話  
 注：林訳は順番変更
- 149 36b × 海鷗吞魚 106 THE SEA-GULL AND THE KITE. T 第152 鷗と鳶の話  
 注：畏廬曰
- 150 36b 獅与熊争 107 THE LION, THE BEAR, AND THE FOX. T 第153 獅子と熊と狐の話  
 注：挿絵は『華英進階』3集136頁から。もとは *THE CHILDREN'S PICTURE FABLE-BOOK*, 1860, HARRISON WEIR 画 p.95より。タウンゼンド300本とは別 p.107。奥付なしの原本、十八版は模写
- 147 36a × 耕者百計 106 THE FARMER AND THE FOX. T 第150 農夫と狐の話  
 注：林訳は順番変更
- 151 36b × 理学家出 108 THE PHILOSOPHER, THE ANTS, AND MERCURY. T 第154 哲学士と蟻と神の話  
 注：畏廬曰
- 152 37a × 村人見鷹 108 THE PEASANT AND THE EAGLE. T 第155 農夫と鷹の話
- 153 37b × 狐与豹争 109 THE FOX AND THE LEOPARD. T 第156 狐と豹の話
- 154 37b × 獅撲臥兔 109 THE LION AND THE HARE. T 第157 獅子と兔の話  
 注：畏廬曰

155 37b ×	有業匠而	110 THE IMAGE OF MERCURY AND THE CARPENTER.	T 第158 偶像と貧乏人の話
156 37b ×	獅与驢狐	110 THE LION, THE FOX, AND THE ASS.	T 第159 獅子と驢馬と狐の話
157 38a ×	有牡牛見	111 THE BULL AND THE GOAT.	T 第160 野牛と野羊の話
	注:畏廬曰		
158 38a ×	有貴人秃	112 THE BALD KNIGHT.	T 第161 秃頭の武士の話
	注:畏廬曰		
159 38a ×	橡樹之神	112 THE OAKS AND JUPITER.	T 第162 橡琺と大神宮の話
	注:畏廬曰		
160 38b ×	猿生二雛	112 THE MONKEYS AND THEIR MOTHER.	T 第163 猿児と猿母の話
161 38b ×	獵狗追兔	113 THE HARE AND THE HOUND.	T 第164 兔と獵犬の話
	注:畏廬曰		
162 38b ×	牧者圈羊	113 THE SHEPHERD AND THE DOG.	T 第165 牧者と犬の話
	注:畏廬曰		
163 39a ×	匠者求材	114 THE OAK AND THE WOOD-CUTTERS.	T 第166 橡琺と木伐人の話
	注:畏廬曰		
164 39a ×	黄蜂棲於	114 THE WASP AND THE SNAKE.	T 第167 蜂と蛇の話
165 39b ×	孔雀張其	114 THE PEACOCK AND THE CRANE.	T 第168 孔雀と鶴の話
166 39b ×	村居夫婦	115 THE HEN AND THE GOLDEN EGGS.	T 第169 牝鶏と黄金の卵の話
167 39b ×	驢馱木而	115 THE ASS AND THE GROGS.	T 第170 驢馬と蛙の話
168 39b ×	鴉見鵲而	115 THE CROW AND RAVEN.	T 第171 烏と扁嘴鴉の話
169 40a ×	有人入深	116 THE TREES AND THE AXE.	T 第172 樹と斧の話
	注:畏廬曰		
170 40a ×	狼語衛牧	116 THE WOLVES AND THE SHEEP-DOGS.	T 第173 狼と犬の話
	注:畏廬曰		
171 40b ×	牛遇獅兒	117 THE BULL, THE LIONESS, AND THE WILD-BOAR HUNTER.	T 第174 野牛と獅子と猪獵師の話
172 40b ×	有善射者	117 THE BOWMAN AND LION.	T 第175 弓手の話
173 41a ×	村人見駝	118 THE CAMEL.	T 第176 駱駝の話
	注:畏廬曰		
174 41a ×	蟹惡斥弗	118 THE CRAB AND THE FOX.	T 第177 蟹と狐の話
	注:畏廬曰		
175 41a ×	牧羊者易	118 THE ASS AND THE OLD SHEPHERD.	T 第178 驢馬と牧者の話
	注:畏廬曰		
176 41b	狐絶溪而	119 THE FOX AND THE HEDGEHOG.	T 第179 狐と蝟の話
	注:畏廬曰。林訳は別の絵。無関係だろう		
177 42a ×	婦人育伏	120 THE WOMAN AND HER HEN.	T 第180 老婦と雌鶏の話
178 42a ×	鷗始亦能	120 THE KITES AND THE SWANS.	T 第181 鷗と鵠の話
179 42a ×	獵犬逐兔	120 THE DOG AND THE HARE.	T 第182 犬と兔の話
	注:畏廬曰		
180 42b	兔与鷹鬪	121 THE HARES AND THE FOXES.	T 第183 兔と狐の話
	注:畏廬曰		
181 42b ×	牛将犏圈	121 THE BULL AND THE CALF.	T 第184 牛と仔牛の話
	注:畏廬曰		
182 43a ×	鹿請糶於	121 THE STAG, THE WOLF, AND THE SHEEP.	T 第185 牝鹿と狼と羊の話
183 43a ×	鷹伏卵於	121 THE EAGLE, THE CAT, AND THE WILD SOW.	T 第186 鷹と猫の牝猪の話
			T 第187 狼と狐の話
184 43a ×	一狼誕銀	122 THE WOLF AND THE FOX.	

- 注：畏廬曰。林訳重版は「一狼誕生」
- 185 43b × 驃飽食而 123 THE MULE. T 第188 横行なる馬の話
- 186 43b × 神巫坐於 123 THE PROPHET. T 第189 占者の話
- 注：林訳重版は順番を後ろ44aへ変更
- 187 43b 二蟆相距 124 THE TWO FROGS. T 第190 二足の蛙の話
- 注：畏廬曰。林訳は別の絵。無関係だろう
- 188 44a × 蛇与鷹靴 124 THE SERPENT AND THE EAGLE. T 第191 毒蛇と鷹の話
- 189 44a 鴉湯見巨 125 THE CROW AND THE PITCHER. T 第192 烏と徳利の話
- 注：挿絵は次と同じ。THE FAVOURITE BOOK OF FABLES /ÆSOP, OR ÆSOPUS LONDON: THOMAS NELSON AND SONS, 1890. 37頁。奥付なし原本、十八版は模写
- 190 44b × 盜客於逆 126 THE THIEF AND THE INNKEEPER. T 第193 盜賊と下宿屋の亭主の話
- 191 44b × 鹿見窶於 127 THE HART AND THE VINE. T 第194 牡鹿と葡萄蔓の話
- 192 44b 飛虫即而 127 THE GNAT AND THE LION. T 第195 蚊と獅子の話
- 注：畏廬曰。挿絵は『華英国学文編』巻2 123頁から
- 193 45b × 狐餒而行 128 THE FOX AND THE GRAPES. T 第196 狐と葡萄の話
- 注：畏廬曰
- 194 45b × 胡桃植於 128 THE WALNUT-TREE. T 第197 胡桃の話
- 注：畏廬曰
- 195 45b × 羔婦於蹟 129 THE KID AND THE WOLF. T 第198 山羊仔と狼の話
- 196 46a × 船人海行 130 THE MONKEY AND THE DOLPHIN. T 第199 猿と海豚の話
- 注：畏廬曰
- 197 46a × 馬行於空 130 THE HORSE AND THE STAG. T 第200 馬と牡鹿の話
- 注：畏廬曰
- 198 46b × 鸚鵡見鴿 131 THE JACKDAW AND THE DOVES. T 第201 鴉と鳩の話
- 注：畏廬曰
- 199 46b × 狐与猴同 131 THE FOX AND THE MONKEY. T 第202 狐と猿の話
- 200 47a × 有人娶妻 131 THE MAN AND HIS WIFE. T 第203 人と妻の話
- 132 THE MAN, THE HORSE, THE OX, AND THE DOG.
- 注：未掲載 T 第204 人と馬と牛と犬の話
- 201 47a × 盜伺人家 133 THE THIEF AND THE HOUSE-DOG. T 第205 盜人と飼犬の話
- 202 47a × 二人同客 134 THE APES AND THE TWO TRAVELLERS. T 第206 猿と旅人の話
- 203 47b × 狐所處終 135 THE FOX AND THE LION. T 第207 狐と獅子の話
- 204 47b × 有黃鼠狼 135 THE WEASEL AND THE MICE. T 第208 鼬と鼠の話
- 注：畏廬曰
- 205 48a × 童子遊於 136 THE BOY BATHING. T 第209 童兒の遊泳く話
- 注：畏廬曰
- 206 48a 孔雀憩於 136 THE PEACOCK AND JUNO. T 第210 孔雀と神の話
- 注：挿絵は『華英進階』3集32頁から。八版、奥付なしの原本、十八版は『華英進階』3集の後刷りから
- 207 48b × 狼隨羊於 137 THE WOLF AND THE SHEPHERD. T 第211 狼と羊飼の話
- 208 48b × 群兔聚獸 138 THE HARES AND THE LIONS. T 第212 兔と獅[子]の話
- 注：畏廬曰
- 209 48b × 人有斲水 138 THE SELLER OF IMAGES. T 第213 偶像を商ふ人の話
- 210 49a × 鸚栖於窺 138 THE HAWK AND THE NIGHTINGALE. T 第214 鷹と鶯の話
- 注：畏廬曰
- 211 49a × 百舌之鳥 139 THE LARK AND HER YOUNG ONES. T 第215 告天子と雛の話
- 注：畏廬曰
- 212 49b × 犬与鷄友 140 THE DOG, THE COCK, AND THE FOX. T 第216 犬と鶏と狐の話
- 注：畏廬曰

- 140 THE GEESE AND THE CRANES. T 第217 厂と鶴の話  
 注：未掲載
- 213 49b × 驢食於田 141 THE ASS AND THE WOLF. T 第218 驢馬と狼の話  
 注：畏廬曰
- 214 50a × 有人畜山 142 THE GOAT AND THE ASS. T 第219 山羊と驢馬の話  
 215 50a × 獅將捕牛 142 THE LION AND THE BULL. T 第220 獅子と野牛の話  
 注：畏廬曰
- 216 50a × 狐入僂人 143 THE FOX AND THE MASK. T 第221 狐と假面の話  
 注：畏廬曰
- 217 50b × 鴟夜搏物 143 THE GRASSHOPPER AND THE OWL. T 第222 乱噪虫と梟の話  
 218 50b × 有膠雀於 144 THE FOWLER AND THE VIPER. T 第223 捕鳥者と蝮蛇の話  
 219 50b × 主人盛飾 144 THE HORSE AND THE ASS. T 第224 馬と驢馬の話  
 注：畏廬曰
- 220 50b 三牛共牧 145 THE LION AND THE THREE BULLS. T 第225 獅子と野牛の話  
 注：畏廬曰。挿絵は『華英進階』3集24頁から。林訳重版は順番を後ろ51aへ変更
- 221 51a × 狼見山羊 145 THE WOLF AND THE GOAT. T 第226 狼と野羊の話  
 注：林訳重版は順番を「三牛共牧」の前へ変更
- 222 51a × 蠅栖於車 146 THE FLY AND THE DRAUGHT-MULE. T 第227 蜻と班馬の話  
 注：畏廬曰。林訳重版は順番を前50bへ変更
- 223 51b 群漁出就 146 THE FISHERMEN. T 第228 漁師の話  
 注：畏廬曰。挿絵は『文学初階』巻2第31丁ウから
- 224 51b 村鼠延城 147 THE TOWN MOUSE AND THE COUNTRY MOUSE. T 第229 都鼠と鄙鼠の話  
 注：畏廬曰。林訳はよく似ているが別の絵
- 225 52a × 狼嘗狐竊 148 THE WOLF, THE FOX, AND THE APE. T 第230 狼と狐と猿の話  
 注：増田本は第52丁を重複させる
- 226 52b × 蜂与鳥並 148 THE WASPS, THE PARTRIDGES, AND THE FARMER. T 第231 蜂と鷓鴣と農夫の話  
 注：畏廬曰。増田本は第52丁を重複させる
- 227 52b × 村人生一 149 THE BROTHER AND THE SISTER. T 第232 兄と妹の話  
 注：畏廬曰。増田本は第52丁を重複させる
- 228 53a × 狗見獅皮 149 THE DOGS AND THE FOX. T 第233 犬と狐の話  
 注：畏廬曰
- 229 53a × 盲人能以 150 THE BLIND MAN AND THE WHELP. T 第234 盲者と狼仔の話  
 230 53a × 補履之匠 150 THE COBBLER TURNED DOCTOR. T 第235 補履匠が売薬者になりし話  
 注：畏廬曰
- 231 53b × 狼躡人田 151 THE WOLF AND THE HORSE. T 第236 狼と馬の話  
 注：畏廬曰
- 232 53b × 二仇共載 152 THE TWO MEN WHO WERE ENEMIES. T 第237 敵同士の話  
 233 53b × 一人畜鬪 152 THE GAME-CKOCKS AND THE PARTRIDGE. T 第238 鬪鶏と椋鳩の話  
 注：畏廬曰
- 152 THE FOX AND THE LION. T 第239 狐と獅子の話  
 注：未掲載
- 234 54a × 蟆一日自 153 THE QUACK FROG. T 第240 庸医の蝦蟇の話  
 注：畏廬曰
- 235 54a × 老獅病困 153 THE LION, THE WOLF, AND THE FOX. T 第241 獅子と狼と狐の話  
 236 54b × 犬方冬睡 154 THE DOG'S HOUSE. T 第242 犬小舎の話  
 注：畏廬曰

- 237 54b × 北風与日 154 THE NORTH WIND AND THE SUN. T 第243 北風と日輪の話  
 238 54b × 人籠得鴉 155 THE CROW AND MERCURY. T 第244 神と鴉の話  
 239 55a 狐延鷺飲 155 THE FOX AND THE CRANE. T 第245 狐と鶴の話  
 注：畏廬曰。挿絵は次と同じ。THE FAVOURITE BOOK OF FABLES /ÆSOP, OR ÆSOPUS LONDON: THOMAS NELSON AND SONS, 1890. 43頁
- 240 55a × 狼行於山 156 THE WOLF AND THE LION. T 第246 狼と獅子の話  
 注：畏廬曰
- 241 55b × 鳥与獸鬪 156 THE BIRDS, THE BEASTS, AND THE BAT. T 第247 鳥と獸と蝙蝠の話  
 242 55b × 一少年喜 156 THE SPENDTHRIFT AND THE SWALLOW. T 第248 放蕩者と燕の話  
 注：畏廬曰
- 243 55b × 吹角之兵 157 THE TRUMPETER TAKEN PRISONER. T 第249 喇叭手擒になりし話  
 244 56a × 角鴟詔群 157 THE OWL AND THE BIRDS. T 第250 梟と衆鳥の話  
 注：畏廬曰
- 245 56b × 拳天下之 158 THE GOODS AND THE ILLS. T 第251 善と悪の話  
 注：畏廬曰
- 246 56b × 驢蒙獅之 159 THE ASS IN THE LION'S SKIN. T 第252 獅子の皮を被つた驢馬の話  
 247 56b × 兔見攫於 159 THE SPARROW AND THE HARE. T 第253 雀と兔の話  
 248 57a 蚤謂牛曰 160 THE FLEA AND THE OX. T 第254 蚤と牛の話  
 注：林訳は別の絵
- 249 57a × 有人性嗜 160 THE ASS AND HIS PURCHASER. T 第255 驢馬と買者の話  
 250 57b × 鴿處籠中 161 THE DOVE AND THE CROW. T 第256 鳩と鳥の話  
 注：畏廬曰
- 251 57b × 羅馬之人 161 THE MAN AND THE SATYR. T 第257 管林者と林神の話  
 注：サチュロスの説明を加筆
- 252 58a × 古人相伝 162 JUPITER, NEPTUNE, MINERVA, AND MOMUS. T 第258 神仏天上に争論したる話  
 注：畏廬曰
- 253 58a 巨鷹下自 163 THE EAGLE AND THE JACKDAW. T 第259 鷲と鳥の話  
 注：畏廬曰。挿絵は『華英進階』3集7頁から
- 254 58b × 鷹与狐友 164 THE EAGLE AND THE FOX. T 第260 鷲と狐の話  
 255 58b × 旧籍有言 164 THE TWO BAGS. T 第261 大袋と小袋の話  
 256 58b × 牝狗将乳 165 THE BITCH AND HER WHELPS. T 第262 懐妊したる羊の話  
 注：畏廬曰
- 257 59a 鹿苦暑就 165 THE STAG AT THE POOL. T 第263 牡鹿と池の話  
 注：林訳は別の絵
- 258 59a × 古籍相伝 166 THE LARK BURYING ITS FATHER. T 第264 告天子の埋葬話  
 259 59b × 虫栖於牛 166 THE GNAT AND THE BULL. T 第265 蚊と牛の話  
 260 59b × 群獸聚於 166 THE MONKEY AND THE CAMEL. T 第266 猿と駱駝の話  
 261 59b × 群狗飢聚 167 THE DOGS AND THE HIDES. T 第267 犬と皮の話  
 注：畏廬曰
- 262 59b × 鴉飢欲死 167 THE JACKDAW AND THE FOX. T 第268 鴉と狐の話  
 263 60a 樵伐樹於 168 MERCURY AND THE WORKMEN. T 第269 水神と樵夫の話  
 注：畏廬曰。挿絵は次と同じ。THE FAVOURITE BOOK OF FABLES /ÆSOP, OR ÆSOPUS LONDON: THOMAS NELSON AND SONS, 1890. 51頁。八版、奥付なし原本、十八版は模写
- 264 60b × 圃者樹蘋 169 THE PEASANT AND THE APPLE-TREE. T 第270 農夫と林檎の話  
 265 60b × 両兵同出 169 THE TWO SOLDIERS AND THE ROBBER. T 第271 二人の兵隊と追剥者の話  
 注：畏廬曰
- 266 61a × 牧者驅羊 170 THE SHEPHERD AND THE SHEEP. T 第272 羊飼と羊の話  
 ————— 170 THE TREES UNDER THE PROTECTION OF THE DOGS.

			T 第273 天神の保護の下に在る樹の話
	注：未掲載		
267 61a ×	蚤嘍人足 170 THE FLEA AND THE WRESTLER.		T 第274 蚤と相撲者の話
268 61a ×	狐与獅約 171 THE LION AND THE FOX.		T 第275 獅子と狐の話
	———— 172 TRUTH AND THE TRAVELLER.		T 第276 誠実と旅人の話
	注：未掲載		
	———— 172 THE MANSLAYER.		T 第277 人殺者の話
	注：未掲載		
	———— 172 THE LION AND THE EAGLE.		T 第278 獅子と鷲の話
	注：未掲載		
	———— 173 THE ASS AND HIS DRIVER.		T 第279 驢馬と馬奴の話
	注：未掲載		
	———— 173 THE THRUSH AND THE FOWLER.		T 第280 鶉と捕鳥奴の話
	注：未掲載		
269 61b ×	飢狼四出 173 THE MOTHER AND THE WOLF.		T 第281 母と狼の話
	注：畏廬曰		
270 61b ×	牝鷄見蛇 174 THE HEN AND THE SWALLOW.		T 第282 雌鷄と燕の話
	注：畏廬曰		
271 61b ×	松蘿立園 174 THE ROSE AND THE AMARANTH.		T 第283 薔薇花と鶏冠花の話
	注：畏廬曰		
272 62a ×	行人徂暑 174 THE TRAVELLERS AND THE PLANE-TREE.	T 第284 旅人と楓樹の話	
	注：畏廬曰		
273 62a ×	驢乞食於 175 THE ASS AND THE HORSE.	T 第285 驢馬と馬の話	
274 62a ×	鴉坐於羊 175 THE CROW AND THE SHEEP.	T 第286 鴉と羊の話	
	注：畏廬曰		
275 62b ×	狐出入樊 175 THE FOX AND THE BRMBLE.	T 第287 狐と覆盆子の話	
	注：畏廬曰		
276 62b ×	驢賀馬之 176 THE ASS AND THE CHARGER.	T 第288 驢馬と戦馬の話	
	注：畏廬曰		
277 62b ×	獅愬於天 176 THE LION, JUPITER, AND THE ELEPHANT.	T 第289 獅子と神と象の話	
	注：畏廬曰		
278 63a ×	犬性嗜鷄 177 THE DOG AND THE OYSTER.	T 第290 犬と牡蛎の話	
	注：畏廬曰		
279 63b ×	二騾重載 178 THE MULES AND THE ROBBERS.	T 第291 驢馬と盜賊の話	
	注：畏廬曰		
280 63b ×	狼逐羊羊 178 THE LAMB AND THE WOLF.	T 第292 羊仔と狼の話	
281 63b ×	羅鳥者得 178 THE PARTRIDGE AND THE FOWLER.	T 第293 椋鳩と捕鳥奴の話	
282 63b ×	人愛臥苦 179 THE FLEA AND THE MAN.	T 第294 蚤と人の話	
283 64a ×	富室与治 179 THE RICH MAN AND THE TANNER.	T 第295 金満家と革匠の話	
284 64a ×	蛇穴於匠 179 THE VIPER AND THE FILE.	T 第296 蝮蛇と鑿[鑿]の話	
	注：畏廬曰。林訳重版は後ろの「獅野行而」と前後入れ替え		
285 64a	獅野行而 180 THE LION AND THE SHEPHERD.	T 第297 獅子と羊飼の話	
	注：畏廬曰。林訳重版は前の「蛇穴於匠」と前後入れ替え。林訳は別の絵。奥付なし原本、十八版は模写		
286 64b ×	駝見牡牛 180 THE CAMEL AND JUPITER.	T 第298 神と駱駝の話	
287 64b ×	豹入陥牧 180 THE PANTHER AND THE SHEPHERDS.	T 第299 豹と羊飼の話	
	注：畏廬曰		
288 64b ×	鷹苦思而 181 THE EAGLE AND THE KITE.	T 第300 鷹と鷲の話	
	注：畏廬曰		

- 289 65a × 鷹見執於 182 THE EAGLE AND HIS CAPTOR. T 第301 鷹と鷲飼の話  
注:畏廬曰
- 290 65a × 国王臨御 182 THE KING'S SON AND THE PAINTED LION. T 第302 皇子と獅子の画の話  
注:畏廬曰
- 291 65b × 牝猫忽思 183 THE CAT AND VENUS. T 第303 猫と神の話  
注:畏廬曰
- 292 66a × 鷹与螻蛄 183 THE EAGLE AND THE BEETLE. T 第304 鷹と蝘虫の話
- 293 66a × 牝羊鬚天 184 THE SHE-GOATS AND THEIR BEARDS. T 第305 牝野羊と髭の話
- 294 66a × 蠅集於鬍 184 THE BALD MAN AND THE FLY. T 第306 秃頭と蚊の話  
注:畏廬曰
- 295 66b × 人碎舟於 185 THE SHIPWRECKED MAN AND THE SEA. T 第307 難船者と海の話
- 296 66b × 貴人以巨 185 THE BUFFOON AND THE COUNTRYMAN. T 第308 滑稽子と田舎爺の話  
注:畏廬曰
- 187 THE CROW AND THE SERPENT. T 第309 鴉と蛇の話  
注:未掲載
- 297 67a × 獵者獲兔 187 THE HUNTER AND THE HORSEMAN. T 第310 獵師と騎者の話  
注:畏廬曰。林訳重版は「獵者」
- 298 67b × 青果之樹 187 THE OLIVE-TREE AND THE FIG-TREE. T 第311 橄欖樹と無花果樹の話  
注:畏廬曰
- 299 67b × 日精忽欲 188 THE FROG'S COMPLAINT AGAINST THE SUN. T 第312 日輪を上訴た蛙の話  
注:畏廬曰
- 300 67b × 銅匠飼狗 188 THE BRAZIER AND HIS DOG. T 第313 鍛冶工と犬の話  
注:畏廬曰。タウンゼンド300絵114本では前の位置に移動

## 清末小説から

野間信幸氏より資料をいただきました。感謝します

- 藤田保幸 広義翻訳作品としての蘆田東雄『字血句  
涙・回天之弦声』の性格 『表現研究』第74  
号 2001.10.31
- 藤元直樹 渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館 国会  
図書館『参考書誌研究』第60号 2004.3
- 羅 衍軍 歩武瑞士 肇建新邦 鄭貴公と《瑞士建  
国誌》 『文教資料』2008年6月号下旬刊  
2008.6.25
- 文 迎霞 商業運営下の文学図景 《申報》早期小  
説刊載現象評析 『江西師範大学学报(哲学  
社会科学版)』第46卷第4期 2013.8 電字版
- 陳 平原 作為“繡像小説”的《文明小史》 蘭州  
『西北師大学学报(社会科学版)』2014年第5期  
2014.9.5
- 山本 勉 明治時代の著述者 渋江保の著述活動
- 出版物「万国戦史」を中心に 『仏教大学大  
学院紀要 文学研究科篇』第43号 2015.3 電  
字版
- 張 霞 清末商務印書館翻訳小説単行本出版研究  
『現代国企研究』2015年第8期 2015.4.23
- 付 建舟 商務印書館“説部叢書”初集考述 『漢語  
言文学研究』2015年第4期 2015.12.15
- 陳 宏淑 ヴェルヌから包天笑まで 『鉄世界』の  
重訳史 『跨境 日本語文学研究』第3号  
2016 高麗大学校日本研究センター
- 王 文君 再議《繡像小説》的停刊時間 讀《申  
報》刊《繡像小説》廣告札記 『中国海洋大  
学学报(社会科学版)』2016年第2期  
2016.3.10
- 劉 堃 域外偵探小説漢訳出版的萌芽 『新聞出版  
博物館』2016年第1期(総第28期) 2016.7
- 程国賦、劉曉寧 新發現的近代小説史料 『文献』  
2016年第2期 2016.3.13 電字版



- 李 哲 『『罵』与《新青年》批評話語的建構』濟南・山東文藝出版社2015.6 李怡、張中良主編『民国歷史文化与中国現代文学研究』叢書
- 沈 素琴 『中国現代文学期刊中的外国文論訳介及其影響：1915-1949』北京語言大学出版社2015.6
- 欧陽 健 『晚清新小説簡史』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2015.10
- 樂梅健、張霞 『近代出版与文学的現代化』上海・復旦大学出版社2015.12 “中国近代文化轉型与文学現代化”叢書
- 張 天星 『報刊与中国文学的近代轉型(1833-1911)』上海・復旦大学出版社2015.12 “中国近代文化轉型与文学現代化”叢書
- HENPINGYUAN(陳平原)著、VICTOR PETERSEN訳  
THE DEVELOPMENT OF CHINESE MARTIAL ARTS FICTION --A HISTORY OF WUXIA LITERATURE CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 2016
- 何 宏玲 『晚清上海文藝報紙与近代文学变革』北京・人民出版社2016.3 隨園文史研究論叢
- 蘇 明 『域外行旅与文学想像 以近現代域外遊記文学為考察中心』北京・中国社会科学出版社2016.8
- 李 貴生 『疏証与析証：清末民初中国文学研究的範式轉移』北京・中国社会科学出版社2016.8
- 『明清小説研究』2016年第3期(總第121期)  
2016.7.15
- 《晚清小説目錄》天津部分補遺 ……李 雲
- 王韜“小説三説”中的蜀地想像 ……干寧寧
- 『文学評論』2016年第1期 「林紆研究專輯」  
2016.1
- 古文伝授の現代命運 教育史上的林紆 ……陳平原  
以洋孝子孝女故事匡時衛道 林紆“孝友鏡”  
系列研究兼及五四“鏟倫常”論争 ……李 今  
論林紆莎士比亞的接受及其文化意義 ……李偉昉
- 張春田編 『“晚清文学”研究讀本』  
桂林・広西師範大学出版2016.7  
中国現代文学研究前沿問題讀本叢書
- 帝制・共和・復古 晚清文学及其他(代導言)  
……李欧梵、陳建華
- 被压抑的現代性 ……王德威
- 現代早期思想与中国革命 ……王曉明
- 中国現代文学中的主觀主義和個人主義  
……亞羅斯拉夫・普夫克著、李欧梵、郭建玲訳  
“文学復古”与“文学革命” ……木山英雄
- “史伝”伝統与“詩騷”伝統 ……陳平原
- 蝶魂花影惜分飛 ……唐小兵
- 從章太炎的“音”至歌謡徵集運動的“音”  
重審白話文運動 ……林少陽
- 我們如何理解這個世界  
《恨海》与晚清中国人的認同危機……李 楊
- 敘事的“鉄屋子”  
魯迅及其晚清進化模式的歷險小説  
……安德魯・瓊斯著、王敦、李之華訳
- 重新思考中国近代“文”的簡單化 ……胡志德
- 世界革命語境中的中国“革命” ……陳建華
- 世界大舞台 ……瑞貝卡・卡爾著、高瑾等訳
- 地緣政治、道德与文化 梁啟超《新中国未來記》  
……王斑著、寧欣初訳
- “不齊而齊”与国家  
章太炎对晚清政治理論的批評  
……慕維仁著、馬棟子、張春田訳
- 朝市与寺廟 清末北京的文人雅集 ……季劍青
- 性別移動与上海流動空間的建構  
從《海上花列伝》中的“馬車”談起……羅崗
- 文学立科 《京師大学堂章程》与“文学”  
……陳国球
- 圖像的轉向与写实主義的欲望  
……彭麗君著、張春田、黃芷敏訳
- “啓蒙讀本” 商務印書館的《伊索寓言》訳本  
与近代文学及出版業 ……韓高文
- 反訳現代符号系統 早期商務印書館的編訳、  
考証学与文化政治 ……孟 悦
- 接受過程中的演繹 羅蘭夫人在中国 ……夏曉虹
- “人的文学”之“哀弦篇” 論周作人与  
《域外小説集》 ……王宏志
- 清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>